
クロード冒険譚

青蛙

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロード冒険譚

【Nコード】

N0383E

【作者名】

青蛙

【あらすじ】

レイモンドール国から出奔し、ベオーク自治国に向かう魔道師修行中の少年とその従者。その修業と日々のこぼれ話。本編のレイモンドール綺譚とその続編の間にあった出来事です。

1 昔話（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になっております。

名前が今と変わっております。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・・ベオーク時代 「カルラ」その後「イーヴァルアイ」

ラドビアス・・・ベオーク時代 「サンテラ」その後、「ラドビアス」

1 昔話

この道は正しい道に続いているのか。

だが、正しい道ではなくても俺は進んで行く。

それが自分の決めた事だから。

「クロード様、あちらをご覧下さい」

後ろから声をかけられて、振り返る少年。

斜め後ろから伸ばされた腕が少年の顔を通り過ぎて眼下を指差す。足元に見えていた海はいつの間にか広葉樹の割合が多い、緑豊かな土地に変わっていた。そのあまりにも濃い緑に少年は目を細める。

匂い立つような柔らかい青葉の絨毯。クロードは、ここがレイモンドールでは無いと思い知らされて一抹の寂しさを感じた。

「イストニア連邦国ですよ。たくさん小さな国の集まりです」

「ここで休む？」

「そうですね、クロード様もお疲れになったでしょう」

二人は深緑の中へ、クロードにとっては初めて生国以外の場所に降り立つ。

「アウントゥエン、サウンティトゥーダ。危険が無いか、辺りを探ってください」

青年の言葉に、赤い大きな狼の姿とドラゴンのような姿の魔獣が相次いで姿を消す。

「何で海を越えたただけなのにこんなに暖かいのかな」

首を傾げるクロードの横では、早速下生えの草を短剣で掃って火

を熾す支度を始めたラドビアスが顔を上げずに応える。

「レイモンドールに吹き降ろす海からの風も、そのレイモンドールの山脈のおかげでここに至るまでには穏やかになっているのですよ。外海のダルム海からの風を防ぐ役割をレイモンドールが担になっているようです」

「ずっるいよな、それ」

「下にこれを敷いてください」

なんだかなあ、と言いながらその場に座ろうとするクロードに見ているかのようにかかる声。

「はいはい」

差し出された薄い毛布を受け取ってクロードは、そこに寝転がった。

見上げる空は、無常なほど青い。クロードの心情など関係なく晴れている。

行くなと言って、涙を流してくれた兄の、クライブの切なげな顔。また、会えるわね、そう言ったアリスローザの寂しげな顔。

そして、悪意に満ちた企みを抱いているらしい、コーラルの顔。

「みんな 置いてきてしまった」

振り切って、利己的な理由のためにレイモンドールを後にした。それを後悔しているのかとクロードは自問する。

「いや、おれは先にいく。後悔はもつと後で考える」

「何か、仰いましたか」

沸かした湯で何かを煮込んでいるらしい匂いが漂ってくる。

「ううん、上手そうな匂いだと思ってさ」

「クロード様はこんな旅は初めてでしょうからね。少しきついかもしれませんが。魔獣を連れての事ですから野宿することもありましょうし」

「野宿？」

手渡された木の器を受け取りながら、なんとなくうなずいてみた。りしたが。やっぱり知らないのだから感想も無い。

「美味しい。ラドビアスって何でも上手いよな」

「上手くもなりますよ。ユリウス様に長年お仕えしていたんですから。レイモンドールに渡るまでの道中も大変だったんですよ」

ぶつくさ言いながら、あつという間に食べ終えたクロードの差し出す器を受け取って、新たに煮物をよそう。

「へえ、聞きたいなあ」

「そうですか？」

だめだと言われるかと思ったがラドビアスは懐かしそうに話を始めた。

地下の通路から出ると、そこはもう、ハオタイ王国だった。急いで古着屋で調達した服に二人とも着替える。頭に布を被ってはいるが、一刻も早くこの地域から離れたほうがいいのは確かだ。

「カルラ様、馬を調達してまいります。ここでしばらくお待ちを」
うなづく様子も無くちらりと視線を送っただけの主人を大木の陰に座らせてから、サンテラは街中に消えた。

何をするわけも無くただ、膝の上に置いた書物を一心に読んでいた少年。書物の上にかかる影にむっとして顔を上げる。

「何だ？」

「お、おまえ」

顔を上げた少年のあまりの人離れした美しさに若い男が固まる。

ここ、ハオタイは外国人の流入も多く、白色人種などそこら中にいる。見慣れているはずだが。

「おまえ、女か」

つい、口に出た言葉に今まで大人しく座っていた少年の顔色が変わる。

「いてえ！」

いきなり頬を殴りつけられて後ろに男はのけぞる。

「わたしは男だ。どこに目をつけている、このぼけ！」
じろりと見上げる少年。

その睨む顔すらまぶしいほどで男は我知らず、少年の手を掴んでいた。
抗う少年を無理やり立たせて逃げられないように腰に手を回す。

「おまえ、気にいった。おれのところに来い。おれはここ、ガランドの領主の息子だぜ」

この身分を出すとどんな女でも思いのままのはず。まあ、こいつは男らしいが。しかし、どうにも気になって仕方が無い。

「おれのところに来たら贅沢し放題だ。さ、行くぞ」

「嫌だ。その汚い手を離せ。わたしは人を待っている。どこに行くつもりも無い」

抵抗するわけではなく、声を荒げるわけでも無いがはつきりと、それも尊大に断る少年に男は驚く。

「おまえ、さっきのおれの言った事聞いて無かったのか。おれは……」

「このガランドとかいう田舎街の領主のばか息子だろう。二度も言うな。耳が穢れる」

「な、何だと」

それが何か？ と言いたげな顔を男に見せる少年に嗜虐的な気持ちになつて持った腕を背中に捻り上げる。

「ふん、おまえの意向なんかどうでもいい。さあ、来い」

肩に担ぎ上げると手からどさりと大きな書物が落ちる。

「あつ」

初めて狼狽したような声を上げた少年に満足そうに男は笑った。

「カルラ様？」

馬を引いて戻ったサンテラの目に映ったのは大木の根元に落ちているごつい本だけ。

「まったく、どこの誰ですか。殺しますよ」

恐ろしい事を涼しい顔でそう呟いたサンテラは印を組む。

『逆手、逆用、後を追え』

呼び出した使い魔にそう命を下すと、黒いぐにやりとした影がいくつも地面の上を走って行った。

「おい、おまえこれに着替えろ」

ハオタイ風の瓦をのせた平屋の広大な屋敷の一角で男は、放るよ
うに金糸をふんだんに使った女物の衣装を椅子に座っている少年に
投げる。

「こんな物。着るいわれがないし。どうやって着るのかも知らない」
攫さらわれて来たはずの少年は、そう言つて服を投げ返す。

「ちつ、おい、おまえ一体何様だ。いや、いい。下女に手伝わす」

手を叩くと頭を低くしてハオ族の妙齡の女たちが三人入って来た。

「こいつにこれを着せろ」

「はい、卿秋様」

女たちが少年の服を脱がしていくのを男は楽しそうに見ている。

ところが当の本人は他人に世話をされる事に慣れてでもいるのか、
恥ずかしがるそぶりも見せない。

「まあ」

下女の一人が下着姿の少年に堪らず声を上げる。

「何てきれいな肌でしょう。しみ一つないわ。このお肌の色ときた
ら」

下女の言葉に興味を抱いて男は近くへ寄ってみる。

「確かに」

ほんの少しの落胆は、やはりこの者が少年だったと分かったから
だが。薄い薔薇色の肌に流れる亜麻色の髪。細い鎖骨のライン
にこくりと喉が鳴る。

思わず、手を触れようとした時。

「ここにいらしたんですね、カルラ様。さあ、行きますよ」

窓枠に足をかけて長身の男が入って来た。

「サンテラ、遅い」

少年が不服げに言う。

「遅くなつたのはあなたがあの場所にいないからです。捜しましたよ」

こちらも負けずに文句をいう。

「何やってるんです？ さあ、風邪ひきますよ。ちゃっちゃと服着てください」

驚く下女をしりめにサンテラと呼ばれた青年はさつさと元の服を少年に着せ始める。

「おまえ、何やってるんだ？」

今まであまりにも普通に入って来て、こちらの事などそっちのけで自分たちの世界にいた二人に驚いていた男が、我に帰って大声を出す。

「警備の兵をどうした？ いいかげんにしろよ。こいつはおれの物だ」

最後の言葉にぴくりと着替えの手を止めて青年は男を見返す。

「誰が誰の物ですって？」

「そいつだ、おれが街で見つけたんだ」

「なるほど、あなたがわたしの主を連れ出しのですか。では、わたしのさつきの気持ちを実行させていただきませうね」

言うが早い、男の首に突きつけられる短剣。 怯んだところを背中に強烈な肘うちをくらって男は倒れこむ。

そこへ蹴りこまれる膝。 そして男の右腕の関節を逆に捻りあげると、ごきりと気味の悪い音が響く。

「ぎやあああ」

青年は、痛みと恐怖で叫ぶ男の腕を、そのまま背中に押し付けながら片膝で男を押さえ込んだ。

「次はどうしましょうか。もう、片方も同じようになりたいですか

？ それとも耳を削ぐほうがいいでしょうか」

「血を流すのは止めておけ、服が汚れる」

泣き出した男を前に少年は肌蹴はだけた服を直すことも無く見ている。

「なんです、もう襟元を結ぶだけじゃないですか。ご自分でやってください」

青年はため息をつくとあっさり男を離す。この場合、男より、服をちゃんと着ていない主人の方が気になるらしかった。

きちんと主人に服を着せ付けると青年は手を差し出す。

「さあ、行きましょうか」

「ああ、でもそいつはどうする？ 警備の者は？」

ああそうでしたね、と青年は言うがもう男への関心は失ったよう
で。 ひよいと主人を抱き上げて肩に担ぐと窓枠に手をかける。

「後どのくらいいるのかは存じませんが、ここら辺に居た者は皆始
末しました」

「そうか、じゃあ安心だな。顔を見られていたら足がつくからな」

主人の言葉にええ、と笑って青年は懷をさぐる。窓から飛び降
りる直前に放った短剣が過たず床の男の胸に刺さった。

「どこに行ってもちよつと目を離すと男女によらず、目につかれて
本当に大変でしたよ。でも術を使えば足がつかますからね。なる
べく使わないようには気をつけていました」

懐かしいですねと笑うラドビアスにクロードはがっくりと肩を落
とす。

術を使わなかったって、ちょっかい出された相手を惨殺してまわ
ったんならさぞかし目立っただけだ。ユリウスの事になると有能
なラドビアスの思考回路がおかしい方向にいつてしまうのは初めか

らだったらしい。

陰惨いんさんな昔話にすっかり胃酸を逆流させたクロードはげんなりと、それからあんな事もあった……と続けるラドビアスをながめた。

1 昔話（後書き）

読んでいただいております。

不定期になりますがクロードとラドビアスの珍道中の話をのせていこうと思っております。

2 しゃぼん（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になっております。

名前が今と変わっております。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・・ベオーク時代 「カルラ」その後「イーヴァルアイ」

ラドビアス・・・ベオーク時代 「サンテラ」その後、「ラドビアス」

2 しゃぼん

イストニア連邦国の外れ、海に近いところまで山が張り出している山中。

その山を越えれば、割と大きな港町になっている。すぐに食料などが調達できる。その利便性をもってクロード達はこの辺にここ数日野宿しながら、結界の張り方などを勉強していた。

陽が昇り、朝露が蒸発して辺りの空気がみずみずしく潤う朝。

その中のちょっとした洞窟の中をつめるような大きな塊り。

一定の調子でわずかに上下しているそれ。 辺りに漂うのは柔らかい眠りで織られた薄い膜のような空気。 上下する塊りに触れて一緒に振れているような。

顔を湿ったものがべりりとなぞっていくのに驚いて目を開けたクロードは、目の前の大きな牙の隙間から出ている舌を押し返す。 嬉しそうな、はあはあという声の主はアウントゥエンという魔獣。 見かけはとてつもなく大きな赤い狼だ。 翼があるのが普通と違うといえばそうだが。

この体温が高い魔獣のおかげでクロードはぐっすりと寝ていたのだ。 丸まって寝ているお腹あたりからもぞもぞと抜け出ると、アウントゥエンも大きく伸びをして立ち上がった。

辺りを見回したクロードはすでにラドビアスが朝食の用意か何かで居ない事を知る。

「おまえはあったかいし、ふわふわだし。 おれ、ずっと野宿でもいいんだけどな」

「グワアッ」

クロードの言葉にアウントゥエンが、嬉しそうに大きな頭をクロードの脇の下に突っ込んでくる。

「ギユウグワツ」

しかし、クロードの言葉に抗議の声を上げたのは横で寝ていたサウンティトゥーダだった。寝心地でいえば仕方ないこととはいえ、寝る時のお供は、黒い鱗で覆われたひんやりした体のサウンティトゥーダより狼の姿のアウントゥエンになる。なので、この数日サウンティトゥーダはクロードに引っついて眠ることができないでいらいらとしていた。

それなのにこの言葉。

収まらないサウンティトゥーダが大きな棘のついた尻尾をアウントゥエンに向けて、なぎ倒すように振る。それに向けて今まで勝ち誇ったような表情でクロードに撫でられていたアウントゥエンが大きな口を開けて尻尾をくわえ込む。

にらみ合う二頭の魔獣。召喚されてから、いつも一緒に結構相性が良いらしい二頭だが。こと自分の主人の愛情については譲れないらしく、何かと小競り合いも多い。

「うわあ、止めるよ！ 何やってんの」

すかさず間に入ったクロードに気づいて二頭の魔獣も動けない。少しでも動くと狭い洞窟の中、大好きなクロードが怪我するのは明らかなのだ。

「もう、喧嘩するなよ。サウンティトゥーダも構ってやるからさ。そーだ、おまえ達体を洗ってやるよ」

いい事を思いついた、と笑うクロードの言葉に二頭の魔獣はさっきの険悪な雰囲気も忘れて嬉しそうに首を振る。

体を洗うって何だとその目は期待で輝いている。

それは美味しいのか。

それは楽しいのか。

まるで分かって無い二頭の魔獣を連れて、クロードは荷物からあるものを取り出して早速近くの川原に降りて行った。

これは美味しくない　サウンティトゥーダは不満の声を上げる。
これは楽しくない　同じく体を泡だらけにしたアウントゥエン
が体を振ろうと身構える。

「だめ、だめ。まだ、ぶるぶるしちゃあだめだからな」

クロードの声に仕方無く二頭は従うが、何でこれが良い事なのか
は分からない。　今まで体をこんなに泡だらけにして洗ったことな
ど無かったのだ。　花のような香り。　魔獣の鼻にはいささかきつ
すぎるようで気持ち悪くなる。　そしてこの泡だ。　ぬるぬるして
気持ち悪い上になめたら物凄く不味かったのだ。　先ほどから全身
あわだらけに自分もなっているクロードが、がしがしと掴むように
長いアウントゥエンの体毛を引っかきまわしている。

それはちよつと……というか、かなり気持ちがいいのだが。

その直前にはサウンティトゥーダもブラシを使ってごしごしとこ
すってもらっていた。

「はーっ、おまえ達でかいから大変だよ。でももうすぐ終わりだ」

そう言うところクロードは自分も服を脱ぐと真っ裸になって川に向か
って走り出す。

「よし、川まで競争！」

言ったものの、魔獣との競争など勝つはずも無く。　興奮気味で
川の中で待っていた魔獣に軽く腕を咥えられてクロードは川の中に
放りこまれる。

初夏とはいえ、朝の川の水は冷たくてクロードは一瞬息が止まる。
ぎゅつと体を絞られたかのような感覚の中。

落とされたままクロードは、水中をもぐってサウンティトゥーダ
の尻尾を掴んでひっぱる。　しかし、倍の勢いで引っ張り返されて
その勢いで空中へ飛ばされる。

それをアウントゥエンがまたもや咥えて引き戻す。

これか？

これだ。

魔獣がお互いに顔を見合わせて笑うように吠える。

それが何回も繰り返されて。

その大騒ぎしているクロード達の方へ向かう人影。

「何、やってるんです。まだ、川の水は冷たいんですよ。風邪でもひいたらどうなさるんです。それに」

冷たいラドビアスの声。それに、のところがやけに低い声だったが。

「しゃぼんを魔獣に使うとはどういう見ですか。しゃぼんなんて大きな町に行かないと手に入らない貴重なものですよ。さあ、上がってください」

手を叩くラドビアスにクロードは、ちえっと小さく呟いて後ろの魔獣を見る。

「しゃぼんがそんなに大事なものなんて知らなかったんだ。いつも使ってるしさ」

「クロード様がお使いになるのは良いに決まってるでしょう」

ラドビアスが手に持った大判の布でクロードを包み込むように拭く。

「わかったよ、今度からは気をつけるよ」

クロードは殊勝にそう言いながら口笛を吹いた。
ぶるぶるぶるぶる……。

それを合図に二頭の魔獣が体を大きく震わせたため、ラドビアスは頭から水に飛び込んだようにびっしょりと濡れてしまう。大笑
いしたクロード、しかし。

「クロード様？」

語尾を上げたのはこの場合、質問では無い。やりすぎたかとクロードは上目遣いで顔を伺う。

「なんですか？」

「い、いや。怒ってる？」

「いいえ、もう食事の用意はできております。服に着替えたらしつさと食べてください。で、今日は体術の稽古をつけさせていただきます

ます」

「ええっ？ 今日とは昨日の続きじゃあ」

頭を必要以上にがしがしと拭かれながらクロードはしまったと思うが。

大判の布を体に巻きつけて歩き出したクロードにすっかりした顔の魔獣がぴったりとつく。クロードの感情の揺れに二頭はすごく敏感なのだ。

いつもは、ラドビアスの言うことにも従っているがそれはラドビアスがクロードの従者兼、保護者だと分かっているためだ。

もし、ラドビアスがクロードに危害を加えるような事があつたら、たちまち二頭はラドビアスを食い殺しているだろう。召喚した主人に無条件に懐くのか、クロードだからなのか。それはわからないが。

「ずっと野宿というわけはいかないですし、もう少し二頭を離すことも考えないと」

そう言ったラドビアスに向けてすかさず、二頭が威嚇のうなりを上げる。

「なんで？」

「この先、街にずっと出ないわけにもいかないでしょう。別の場所で寝るように懇めてくださいよ、クロード様」

負けずに二頭にきつい視線を送ってラドビアスはクロードを見る。「クロード様、お食事が終わったら町へ行ってみましょう」

体術の練習は？ 聞こうとしたがラドビアスはさつさと火が気になるからと背中を向けて足早に斜面を駆け上がって行った。「町か」

久しぶりに他の人間と会うのもいいかもしれない。

でも、とクロードは思う。ここに留まるより早くおれはベオークに行きたい。体がもつなら、不眠不休でもいいくらいなのに。

一向にここを出ようとしなないラドビアスに不満もたまる。

「今日はおれもきつちり話をつけなきや」

クロードは少し湿った二頭の魔獣の頭をかきながらラドビアスの背中に向けて呟く。

食事の後、クロードに山から出ないようにきつちり言い聞かされた魔獣は不服そうに鼻をならす。しかし、山道から街道に出る手前で再度ラドビアスにきつく言われて仕方なく来た道の上を飛び去っていく。

街道を下って行くとだんだん人の往来も賑やかになっていく。

レイモンドールと似ているがやはり、そこはお国柄が出るのだろう。人種は同じでも着ている物や髪型など少しづつ違っていて見ていて飽きない。

「ねえ、皆襟が高い服が多いね」

「ああ、あれですか。なんでも貴族なんかは襟の飾りだけで顔の三倍はあるらしいですよ。レースや細密な刺繍で飾れば飾るほど良い物らしいです」

へええと感心しながら左右を見回しているクロードはどう見てもただの観光客。おのぼりさん状態だ。

「あちらで一休みしましょう」

ラドビアスが噴水のある広場にある休憩用の椅子を指差す。

「ラドビアス、おれさあ」

座ると同時に話し出したクロードをラドビアスはだめですと一言で黙らせる。

「このままベオークには参りませんよ、クロード様」

「なんでだよ、早くしないとおれじいになっちゃう」

分かってますと簡単にいなされて懨然とするクロードにラドビアスは肩に手を置く。

「今のままではクロード様は必ず、死にます。経典を出す、出さない、そんな交渉など受け付けてくれないほど弱い。この西側の大陸一帯に留まり、魔術と剣術、体術の勉強を腰をすえてなならないと」
「必ず死ぬって。そんなのわからないし、おまえだっているじゃな

いか。魔獣だっているし」

「わたしだって相手になんかなりませんよ。あっちにはわたしみたいな僕がごろごろしているんですよ。ビカラ様がお元気になられていたなら、わたしや魔獣など何人いたってダメでしょうね」

ラドビアスはそう言い切ってクロードを見つめた。

「そんなに強いのか？」

ええ、とうなずくラドビアスにそんなにはつきり言うなよとクロードは天を仰いだ。

眩しい光が矢のようにクロードの目を刺してたちまち目の前が真っ白になる。

「そう、長いことではありません。ベオークには直行しませんが少しづつ東へは行きますし。クロード様、どうしてここへ来たか分かりますか」

頭に手を置かれて、クロードはゆっくりと横の方へ顔を向けた。

「だって、ちょうど降りるのに都合が良かったから。じゃないのか？」

「ここの廟には勉強になるものがあるんですよ」

偶然かと思っていたのに、ここに初めから来る予定だったとは。

外国のこんな何てことのない港町の廟に何があるのか。そして五百年以上も国から出てないのにそんな事を知っている、あるいは覚えているこの男に改めてクロードは驚く。

「そういう事なら。今から行くのか？」

「ええ」

「アエントウエンとサウンティトゥーダにお土産買ってあげたいんだけど」

「いいですよ、何を買われるおつもりです？」

「山羊か羊の頭と臓物。それと馬の舌を何個か。大牛の目玉を二つづつ、あとはねえ……」

「そんなもん持って街をうろつこうと思ってたんですか。だめに決まってるでしょう」

ええーつと不貞腐れたクロードにラドビアスが冷たく言う。

「だいたい、大牛の目玉なんてそこらで売ってるわけないでしょう」

「そうなの？ 飴みたいに美味しそうに舐めてるんだけど」

「それは大牛じゃないと思いますよ」

クロードがそれじゃあ何だと問いたげな顔を向けると、ラドビアスはにまりと笑った。

「何だと思います？」

もの凄い悪い顔にクロードはどきりと目玉を舐めている魔獣を頭に思い描く。

丸くて、ちょうど人間の　。

聞きたいが聞けない。

笑っている顔がやけに怖かったのだ。

何を舐めていたのかより、ラドビアスの方が　。

3 日記（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。
一話一話、独立した話になっております。

名前が今と変わっております。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・・ベオーク時代 「カルラ」その後「イーヴァルアイ」
ラドビアス・・・ベオーク時代 「サンテラ」その後、「ラドビアス」

3 日記

灰色の陰鬱な外観。

賑やかな噴水のある広場近く、一つ二つ通りを外れただけでこんなにも静かなのか。

誰もいない通りの前でクロードは廟に入るのを躊躇^{ためら}う。

そこだけ、町の中心から取り残されているような。

ひっそりと膝をかかえているような日陰の一角。

「ここに入るの？」

隣で歩いている背の高い男に尋ねると男は不思議そうに少年を見下ろす。

「そうですよ、どうしたんです？」

クロードは上手く説明できずに頭を横に振る。

廟は、誰にでも開かれている。

しかし、その真の姿まで広く開かれているわけではない。ほんの入り口。口当たりの良いところだけは確かに見せてはいる。

それは、レイモンドルの廟でもここでも同じなのか。

門を潜って敷地に入ると微かに魔術の痕跡が感じられる。押し返すほどの障壁では無いが、顔や体に当たるのは侵入者を知らせるための結界が張ってあるのだ。

クロードにもそんなことくらいは感じられるようになってきていた。

建物の大扉は開かれていて、お馴染みの薄暗さが中をいつそう謎

めいた空間に見せている。

クロードのためらいなど関係なく、見知った所のようにラドビアスは廟の中に入って行った。

レイモンドール国の廟と違っているのは、その廟の中に描いてある文字にレーン文字が無いこと。　こちら辺の大陸の西側は、古代レーン文字を源流とするアーリア語が主流になっている。　各国、地域によって少しづつ訛りや、音の読み方に違いがあるが。

それでも、ここにレーン文字は一つも無い。　それは魔道教が大陸の東、ベオーク自治国の影響下にあるためだ。

レイモンドール国の魔道教は、レーン文字を魔道師の祖であるイーヴアルアイが組み込んだために範字とレーン文字の二つの術が混じっている。　つまりこの世界では特異な物なのだ。

だがクロードにしてみれば、初めて教わったのがレイモンドールの術だったわけで、範字ばかりの術はかえって不思議な感じがする。「ここには、何があるのさ」

「入ればわかりますよ」

さあ、と自分の家のように奥に進むラドビアスの後をしぶしぶクロードも続く。

「どこへ行くのですか。この奥へは一般の方は遠慮してもらってお願いします」

若い魔道師がやんわりと、だがきつぱり二人の行く手を阻む。

「だってさ、どうするの」

クロードの声にラドビアスは待ってください、と軽くいうとその若い魔道師に当身をくらわせて脇によける。

「さあ、行きましょう」

あっさり、不法侵入をする自分の従者にため息をつきながらクロードは奥に向かう。

奥に見えた祭壇の前に立つとラドビアスは複雑な印を素早く組んで呪文を唱える。

『解呪、解印、解封、在りし物ここに現せ』

呪文が終わると同時に、祭壇の飾りの一部がゴトリという音と共に落ちて砕ける。

「壊しちゃったの？」

クロードが誰かが今の音に気づいてやってくるんじゃないかと思っている横で、ラドビアスはすまして壊した所から中に手を突っ込む。

「早く、誰か来ちゃうよ。何が入ってんの？」

おろおろと見るクロードの前に突き出される本。

「え？ 何これ」

「本ですよ」

「そんなの、見ればわかるよ。何の本なのさ。わざわざ取りにくるって」

ふうと埃を吹き飛ばすと軽く本の表面を一撫でしたラドビアスが、立ち上がる。

「大陸の西側一帯の言語の本ですね。昔、ユリウス様が勉強なさって邪魔になってここに置いて行った物です」

「は？」

それがどうしたと言わんばかりでクロードはラドビアスの顔を見たが、ラドビアスは嬉しそうに本を捲る。

「ほら、ここに書き込みとがありますよ。お綺麗な字ですねえ、あ、ここには落書きが」

「ちよつとラドビアス、大事な物つてもしかしてこれじゃあ無いよね。おれの勉強になる物つて言つてたよね。これが何の勉強になるのさ」

クロードの抗議にも手を休めないラドビアスに焦れてクロードが体を揺らすとやっと彼がこちらに向く。

「何ですか？ クロード様」

「何ですか、じゃないだろう。おれのためとか言つて自分が欲しかっただけじゃないか」

ラドビアスは本をぱたんと閉じるとクロードに再度本を差し出す。

「これでクロード様もお勉強なさるんですよ、言葉を」

「何で？」

少しの間後。ラドビアスは必要だからです、と宣言したがそれは詭弁ぎべんにすぎないのは明らかだった。

「一日潰してこれ取りに来たんだから、こっちの要求を聞いてもらえるかな」

「要求ですか」

「そう、牛の頭買いに行くから」

クロードに仕方ありませんね、とわがままに付き合った風に言ったラドビアスは、自分でもこれはクロードに関係ないとは思っているみたいだった。

ラドビアスは不信な音に集まって来た魔道師たちを、全員術で縛ると用は済んだとばかりに出て行く。

「ラドビアス、解除しなくていいのかよ、術」

後ろから追いついたクロードに彼は前を向いたまま応える。

「あそこの廟主が帰ったら解くんじゃないですか。あの場にいなさそうでしたから」

ラドビアスが、いつも穏やかで誰にでも優しいなどとは最早クロードも思っていない。この男が結構自分のこだわり以外には冷淡なことは分かってきていたから。

賑やかな通りに戻ってクロードは肉屋を捜して走り出す。肉の塊りが描いてある看板を見つけて入ってみる。店主らしい親父の背後には何の肉なのか、肉の塊りがずらりと太い金属の針につるされている。

「いらつしゃい、ぼうずお使いかい？ 何を頼まれたんだい」

クロードにはよく聞き取れない訛りのため、二度聞き直してクロードは意味を理解する。つまりお使いを頼まれたがき扱いなんだな。

「じゃあ、牛の頭を二つほど。できれば大牛がいいんだけど」

「ええ？」

クロードの喋る言葉も分かりにくかっただろうが、大牛の頭を母親に頼まれて買いに来る少年もあまりいないだろう。普通の牛の二倍はある大牛の頭をを二つも何にするつもりか？ 店主は聞き間違いかと首を捻る。そこへ。

「普通のでいい。牛の頭だ、それを二つ。それから干し肉を一包み、骨付きのハムを二つほど包んでくれ」

少年の肩の辺から顔を出した上背のある、少年の保護者らしい男がはつきりと声をかけてきた。

「言葉が通じなかったでしょう？ だから勉強は必要なんですよ、クロード様」

「ちえっ、それを言いたかったんだな。ラドビアス」

外国人風の身なりだが背の高い男の言葉は流暢で、服さえ同じならこの土地の者とは区別などできないだろう。

「はい、お待たせ。こんな大きな牛の頭を何にするんです？」

「食べるんだよ、勿論」

少年の返事に店主は驚いて二人を見た。今、食べると言ったか？ 目を丸くした店主を置いてクロードとラドビアスは歩きだした。

「あのおやじ、おれたちが食べるかと思ってたかな」

「わざと言わなかったでしょう、クロード様」

うん、と笑うクロードにやれやれとラドビアスは言うが顔には笑みを浮かべていた。

クロードが山道にさしかかるとがさがさと低木を掻き分ける音が盛大に聞こえて。

「アウントゥエン、サウンティトゥーダ」

声をかけると、飛び出してきた大型の獣。

もし山中で知らない人がこの二頭に会ってしまったらもう、自分の命は無いと覚悟しただろう。暗赤色の見上げる大きさの狼。黒っぽい物語に出てきそうな鱗を持った獣。

その二頭が大きな口を目一杯開けてこちらを見ている。

「なんだあ、もうわかっちゃったの？ そうだよ、お利巧にしてた

からお土産があるんだ」

クロードの言葉に喜びの雄たけびを上げて二頭の魔獣がクロードを押し倒す。

知らない人が見たら絶対、少年が恐ろしい動物に襲われているとしか見えない図だ。

「わははは、止めるよ。くすぐりたい」

何とか二頭の魔獣のじゃれつきから逃げ出してクロードはにこりと笑った。

「で、どっちがおれを乗せて帰ってくれるの？」

あんなことを言うのじゃなかった。クロードは後々まで後悔する。

あのクロードの言葉の後、恐ろしい争いが始まってしまふ。辺り一面、アウントウエンが吐いた炎で焼き尽くされ、残った木々はサウンティトウダーの強靱な尾によりなぎ倒された。

にらみ合う二頭の魔獣が距離を取って離れたところで、すかさずクロードが間に飛び込む。

「おまえたち、今すぐにやめないとお土産はおれとラドビアスで食べちゃうからな」

その声に二頭はピタリと動きを止めてクロードに注目する。

「もう、歩いて帰るよ。喧嘩ばかりするんだから、今日はおまえたち外で寝ろ」

クロードの言葉に二頭の魔獣は頭をうな垂れる。その様子に可哀相になって許してやろうと口を開こうとしたが。

「だめですよ、彼らを甘やかしたら。今日は晩御飯抜きですからね」「う、うん」

恨めしそうに見る魔獣を見ないように、前だけを見ながらクロードは朝いた洞窟に戻る。

日が暮れて少し寒くなったが今日はぬくいアウントウエンもいない。仕方無く毛布を体に巻きつけていると、昼に持って帰ってきた本が置いてある。

僅かな明かりを頼りになんの気なしにパラパラと捲っていると、本後半の余白にいろいろ範字で書き込みがある。

それは、勉強の疑問や、覚えておきたいことだったり。そして、その日の日記らしい書き込みも あった。

（月×日。今日は、サンテラがうるさいからどこにも行けなかった。市が立っていて珍しい宝石とかあるかもしれないのに。面白くないからふて寝する）

「へええ、ユリウスったらこんな事書いていたんだあ。サンテラってレイモンドールに来る前のラドビアスの名前だよな」

クロードは笑みを浮かべて次のページを開く。

（月×日。今日は、サンテラが洗濯してる隙に出かけたら、旅回りの劇団と一緒にこないかと誘われる。面白そうだからついに行っただが、女の格好をさせられそうになったので術をかけて逃れる。そこでサンテラに見つかってまた、怒られた。最悪。あいつはわたしの母親か？。口うるさ過ぎ。本当は、中年のおばさんなんじゃないのか。）

「あははっ。そういや、ユリウスもこの頃っておれと同年くらいか。偉そうだったけど結構思ってることや、やることはおれと変わらないじゃんか」

面白くなってきた、次々と捲っているとラドビアスが洞窟に入ってきた。

「おや、クロード様。お勉強をされているんですか」

「うん、まあ。ねえ、ラドビアスはこれをもう見たの？」

「いいえ、最初の辺くらいですが」

やっぱりねえとうなづくクロードはにやにやとしながらラドビアスを見あげる。

「一体どうしました？ 気味悪いですよ」

クロードにもう一枚毛布をかけながらラドビアスは眉を上げた。

「見てみる？」

「いいですけど。語学の本ならクロード様にこそ読んでいただきたいものです」

いつもの勉強では見せないような楽しそうな顔のクロードに不信感を見せながらも、受け取った本をラドビアスは開く。

しばしの沈黙の後。

そのまま置かれる本。

「どう、だった？」

それには応えず、代わりにラドビアスが厳しくクロードに告げる。

「もうお休みください。明日は早いですよ」

「あ、はい」

ちらつと見た本の余白にある走り書きは。

（サンテラ。あいつ、むかつく）

一言だけだった。

4 幼い記憶（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。
一話一話、独立した話になっております。

名前が今と変わっております。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・・ベオーク時代 「カルラ」その後「イーヴァルアイ」
ラドビアス・・・ベオーク時代 「サンテラ」その後、「ラドビアス」

4 幼い記憶

明るい日差しが、細かい粒子になってシャワーのように降り注ぐ
午後の街中。

宿の窓を通して小さいこどもの笑い声が響く。

楽しげな声に誘われるように窓辺に向かう少年。

何人かのこどもたちが手に何かを持ちながら鬼ごっこのように追
いかけ、追いかけれながら笑う。

こどもの笑顔に自分の失ってしまった時間に思いをはせて少年の
顔に影がさす。

おれは見た目はいつまでもがきなのに。それにしても。

「小さかった頃？　なんか覚えてないんだよな」

クロードは窓の外に目をやる。覚えているのはモンド州にいた
頃からだだけだ。もっと小さかった頃はゴートの廟にいたはずなの
に。

その頃のことは何もクロードは覚えてなかった。

ふいにうえーんという大きな声とやわらかいものを叩いた湿り気
のある音が響く。

さらに、大人の叱りつける声がして、先ほどとは打って変わった
子供の泣き声。

「あんなにおこらなくてもいいじゃんか」

クロードは出窓に腰をかけてぶつぶつと言う。

「でも、何かわけがあるんですよ。一部分だけじゃなんとも言えま
せんよ」

自分の意見に同意してくれるかと思ったクロードは、後ろを振り返る。 やんわりと笑いながらこちらを見るラドビアスは備え付けの椅子に腰掛ける。

「小さいこどもは手がかかりますから」

「小さな子供の面倒なんか見たことがあるの？ ゴートの廟にいたルークなら分かるけどさ」

クロードの言葉にそうですねえ、とラドビアスは話を始めた。

レイモンドールの魔道教の総本山、ゴート山脈にあるレイモンドールーの標高を持つ霊山ハンゲル山。

その廟主であるルーク。 彼は急いで忘れ物を取り上げると竜門を開ける。

次にルークがモンド州の州城の一角に竜門を開けて出た途端、厳しい声が飛ぶ。

「遅い」

目の前には椅子にふんぞり返っている七歳ほどの子ども。

「申し訳ありません。 ちょっと忘れ物を取りにゴートの廟に戻りました」

「どうでもいいが、がきを置いていくな。 さっきから泣いてうるさくてならん」

亜麻色の髪を肩下に流した驚くほど整った顔の少年が、面白くなさそうに指差した先にいる四歳くらいの子ども。

泣きつかれたのか床に座り込んでいた。 が、ルークの顔を見つけるとぱつと顔が明るくなって走りよって来る。

「ルーク、どこに行ってたの？ 寂しかったのに」

「おやおや、こんなにたくさん人がいるじゃないですか、雛ちゃん」
ルークは慣れた仕草でひよいと少年を抱き上げると、その体に毛

布を巻きつけてやる。

「ほら、これを取りに行つてたんですよ。これが無いと寝られないでしょう？」

「わあー！ ありがとう、ルーク」

しがみつく少年の姿に大きく舌打ちをする亜麻色の髪の少年。

「おい、ルーク。いい加減にそいつを降ろせ。そして、クロード。

おまえは今日からここで暮らすんだから何時までも泣いてるとひっぱたくからな」

「ええーっ？ 嫌だ。ゴートの廟でルークと一緒にがいい」

「だめだ。わたしと一緒にここで暮らすんだ」

「うわーん！」

大声で泣き出した少年にまわりの大人がおろおろと見下ろす。

「なんとかしろ、ラドビアス」

「と、言いましてもわたしは小さい子供なんて相手にしたことがありませんよ」

「じゃあガリオール、おまえ子だくさんの家出身だろ！」

「いえ、わたしは末っ子でして」

だんつ、と両足で床を蹴るように椅子から飛び降りた少年。足音荒くルークの手を握り締めるクロードと呼ばれた少年の手を掴んで自分の方へ引きよせた。

「今日からわたしがおまえの兄だ。甘えていいからな」

「いやだあ！ ルークがいい！」

クロードの言葉の後に殴りかかろうとする少年をラドビアスと呼ばれた長身の男が抱きとめる。

「イーヴァルアイ様、いけません」

「くそっ！ ルーク、おまえの育て方が悪い」

「そんなあ、イーヴァルアイ様こそ、今は子どもに擬態なさっているのにそんな態度はないでしょう？ 七歳だなんて誰も思いませんよ。だから雛ちゃんが怖がるんです」

「ふん」

鼻を鳴らしたイーヴァルアイと呼ばれた少年がルークを睨むように見上げる。

「たった今からクロードを雛ちゃんとか言つのを禁じる。こいつはわたしの弟としてここで普通の暮らしを送らせるんだからな」

「はあ、承知しました」

うなずくルークは、しゃがみ込んでクロードをぎゅっと抱きしめてから離す。

「ようございましたね、クロード様。次王にお仕えになるまでここで幸せにお暮らし下さい」

「ルーク？」

慇懃に挨拶をするルークに幼いクロードも別れを感じて手を伸ばしたが、ルークは笑顔のまま竜門をくぐり、ガリオールもサイトスへ帰って行った。

「あの……」

イーヴァルアイと呼ばれた少年におずおずと声をかけてくる、クロード。

「何だ？」

もじもじとする小さい少年はなかなかその先を言わない。

「だから何だと言っている！」

「イーヴァルアイ様、そんなふうに仰っては怖がって何も言えませんよ」

ラドビアスがはらはらと横から声を出す。

今まで王の半身は次の王が即位するまでゴートの廟で育てられていたのだ。だが、今度のコーラル王の子どもを主が見たときから扱いが違っていた。

それはこの国の魔道師の祖であるイーヴァルアイが、半身をモンド州のハーコート公爵の子どもとして預けるように決めた事。

あまつさえ自分まで公の子どもになると言いだしたのはラドビアスは驚いたが。

「怒らないから、早く言え！」

その言い方がすでに怒っているのだが言ってる本人は気付いていない。

「えっと……、おしっこ」

「何？」

「ああ、お手洗いにいきたいんですね。さあ、行きましょう」

「何だ、おしめでも当てるのかと思っていた」

「いくらなんでもクロード様は四歳なんですから、おしめは当ててないですよ」

「そうなのか？」

少年の手を引きながらラドビアスはため息をつく。この少年の記憶を消したほうがいいのかもしれない。ルークに思いを残しすぎていては良くない。

わたしに、こんな小さな子どもの面倒が見れるのか。いや、それよりも七歳に擬態した主の面倒をみる事が出来るだろうか、と。

「結局クロード様は主城の方で育ちになりましたから、わたしが相手することもありませんでしたが」

話を聞いてなるほどクロードは自分の記憶が無いことに得心がいく。王の半身は魔道師としてルークに大きくなるまで養育されるはずなのに自分にはその記憶が無かった。

それは、別れたのが小さかったからもあるが、ラドビアスによって記憶を消されていたと言うことなのか。

半年くらいしか付き合いが無かったと思っていたルークに四歳まで育てられていたのか。

彼に親しみを感じていたのは、そのせいなのかと記憶の中のルークを懐かしく思い出し笑みを浮かべた。

「ねえ、ユリウスって小さいこどもの頃はどんなだったの？」

「本当にお小さい頃。ベオーク自治国でお暮らしの頃はそれは愛らしいお子様でしたよ」

「へええ、あいつが愛らしいって言われても素直にうなずけないよなあ」

「そうですか？ あの後もずっとユリウス様は可愛いかったと思います」

ええっ？ とラドビアスの顔をじっくり見るが、その顔は本当にそう思っている確信の顔だ。ラドビウスにとってユリウスがドラゴンに変わったとしたって、（お可愛い）としか思わないだろう。

クロードは大きいため息ついて窓に視線を移す。

ラドビウスがいかにユリウスが可愛いかったのかを話す声が昼間の穏やかな空気に溶けていく。

そして。

「おい、いいかげんにしろよ、ラドビウス」

半刻たったところでクロードが立ち上がった。

5 祭りの夜（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。
一話一話、独立した話になっております。

名前が今と変わっております。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・・ベオーク時代 「カルラ」その後「イーヴァルアイ」
ラドビアス・・・ベオーク時代 「サンテラ」その後、「ラドビアス」

5 祭りの夜

夏の気配が近いこの頃。 朝夕はまだまだ肌寒いが昼間はむっとするほど。

その森に張った結界の中で繰り返す術。

クロードの放った炎が結界の中のブナの木を一瞬に燃やしつくす。
「今日はこのくらいでお終いにしましょう」

あつさりと指の動き一つで大きな炎を消すとラドビアスは結界を解いた。

「お疲れでしょう？ 朝から休まないで練習されていたんですから」
「うん」

緊張感から解き離れてクロードは、ほっと息をついて辺りを見回した。 暖かい空気はそのままに、それでも太陽は暮れていくとあつという間にその姿を消す。

足元を取られないように気をつけながら歩いていくと、村に向かう手前の灌木もまばらな中に何人もの若者が二人連れで入っていく。
「何？ 何なの、ラドビアス？」

ああ、そう言ってラドビアスは決まり悪げにクロードを見下ろす。
「だから、何なのさ」

重ねて聞くクロードにラドビアスは、ため息をつきながらわずかに歩みを速める。

「今日は、この辺の村の祭りです」
「で？」

「クロードさま、ここら辺で祭りの晩っていうのは、男女が思いを遂げる機会でもあります」

早口でまくしたてるラドビアスにクロードはへえーとのん気な声をあげて。

「それってどういう？」

クロードの質問にラドビアスはぎくりと立ち止まる。

「クロードさま、あんまりこどもっぽい事を仰るとわたしも怒りますよ。暗がりですぐに男女がやることなんて決まっていますでしょう」

大声を出すラドビアスに、今度はクロードがうるたえて宿める^{なだ}。

「うわあ、ごめん。そうだよなあ。わかったから、声小さくして。お願い」

早くこの危険地帯を抜けなくてはとクロードはぐくりとつばを飲み込んだ。

その灌木の林の反対側の使われてない猟師子小屋に落ち着いたクロードは、ラドビアスが熾した火の前でうつらうつらしながら寛いでいた。

「クロードさま、お休みになったら毛布のところまでお連れしますから横になってください」

「うん、そうする」

暖かい火の前で横になった少年を見るラドビアスは、ふとこんな事が前にあったのを思い出していた。

それは、もう五百年前の事。

ベオーク自治国から逃げた二人は、目立たないように旅を続けていたため、野宿も多い。

こここのところ野宿が続いて主人の疲労は頂点のようだった。そこに見つけた作業小屋。

心からほっとして中をのぞく。

「カルラさま、お休みになられるのでしたらあちらに敷布を敷いてありますよ」

こくり、こくりと頭が揺れる主人にサンテラは声をかける。

山中でやっと見つけた無人の小屋をざっと片付けて火を熾すと、さっそくカルラは船を漕ぎ出したのだった。

「カルラさま」

「うーん、寝たら連れて行って、サンテラ」

カルラはむにやむにやと口の中でそう言う構わず横になる。それをだめですと言いながため息をついてながめていたサンテラだったが。火の粉が主人に飛んではと、膝について庇うようにカルラを抱き上げた。

「こんな硬い床でお休みになられたら、明日体が痛みますよ」

そこでサンテラの動きが止まる。カルラの長い亜麻色の髪が抱き上げた事によって覆っていた額から滑り落ち、肩に流れた。

さらさらとすべるように流れる髪。

この髪は昨日自分が丁寧に洗ったものだ。カルラは、必要なく体に触れられることを極端に嫌う。

だから、サンテラは何かと理由をつけてカルラの世話をする。手をかけ、言葉をかける。

髪をこうやって梳くのもお世話しているのだからと自分に言い訳をしながら、髪に手を差し入れる。

そして残された数本の髪を払おうと顔に指を近づけて……。

わずかに開いた唇が目に入ってしまう。暗闇の中、炎に照らされて上気した頬。長い睫。

誘うような唇。

はっと慌ててサンテラは顔を背ける。

今、わたしは何を考えていた？ この方はわたしの主人だ。

そう言い聞かせて、顔を戻す。しかし、自分は正式にはまだカルラの兄のバサラの僕なのだった。背中にある龍印はバサラの物だ。なぜ、主人を裏切ってカルラについて来たのだろう。龍印を受けた僕は普通主人以外に興味を持つことは無い、そう聞いているのに。

自分はどうして違うのか。ほんの幼いカルラを見たときから。心はカルラの物だった。

あの時、必死で逃げるカルラを見過ごせなかった。

一番上の兄を殺したと思い込んで逃げる血まみれのカルラを助きたいと。

いや、このまま離れるわけにはいかないと。

これは、まさか恋情なのか。　わたしはカルラを、愛しているのか。

二人で逃げる先に何があるのか。

しかし、サンテラには悲壮なカルラとは別の甘い感情をいただくのを抑えられなかった。

わたしだけを頼って。

わたしだけを見て。

例えそれがしもべという立場だったとしても。

この世の中で二人きりという究極の立場に今は　いたい。

それで十分だと思っていたのに。　人というものの欲望の制限ない事にサンテラは苦笑う。　一つが満たされたらその次、そしてまたその先へ。

自分のこの思いを伝えたい。　そしてその次は……。

考え事をしているサンテラに抱かれて眠るカルラは、寝ぼけているのか、その手をサンテラの襟元にのばしてぐいっと引っ張る。

あと少しで触れようとするその距離にサンテラは、抗えずに固まる。

「カルラさま」

掠れるような声は、本当に主人を起こそうとする声なのか。

この先を自分は見たいのか。　それとも避けたいのか。

口付けの後は。　自分の欲はどんな先に行けと叱咤するだろう。だが、主人は、カルラがそれを望むことはあり得ない。　だが、一回きりなら。　蔑まれても嫌われても思いが適うなら本望なのではないか。

バサラの事を悪し様に言えない自分。　それは自分も同じだから

だ。

同じように無理やり、思いを遂げてしまふ。それでいいのか。自分を愛すことは、本当に無いと言えるのか。一方通行ではない関係を。築けると思うのは欲張りな事なのだろうか。

サンテラは顔を落とすと触れるだけの口付けをして。

「カルラさま、敷布の処までお連れします」

そつと抱き上げて出来るだけゆっくりと歩く。包むように抱い

ているカルラの体を刻むこむようにゆっくり。

「サンテラおやすみ」

「お休みなさいませ」

体を下ろされたことで眠りの縁から寸の間戻ったカルラに、そつと言つとサンテラは断ち切るようにその場を立った。

その時のことが鮮明に胸の痛みとともに思い出してラドビアスは顔をしかめる。あの判断は正しかったのだろうか。

あれから五百年もの長い年月を共に過ごしたがあたが。

しつこいのはヴァイロンにこだわっていたカルラのほうか。自

分のほうなのか。

主従ともに報われないことにこだわっていたものだ。

「ばかみたいですね」

一人ごちてクロードを軽々と運ぶとラドビアスは、獵師小屋の戸を開けて闇へと消えた。

「お早う、ラドビアス」

大きく伸びをして起きたクロードは、壁にもたれ掛かるように座り、足を投げ出しているラドビアスを見る。

「お早うございます。クロードさま」

うつすらと笑う従者の男の顔にくまがあるのに気づいてクロードは心配げに声をかけた。

「ねえ、寝られなかったの？ おれのせい？」

「いえ、寝られなかったのは本当ですが、それはクロードさまとは関係ありません」

「ラドビアス？」

なんでもありませんよと笑いながら立ち上がった彼は、クロードにその先を答える気はまったく無いかのよう。

「昨日は皆、幸せだったのかなあ？」

クロードの問いにさて、とラドビアスは応じるとそそくさと出立の準備を整える。

「この山をさつさと越えてしましましょう。クロードさま」

小屋を出て峠に差し掛かったクロードは、超えてきた山々を振り返ってうつと声をあげる。

クロードの目前に広がる荒涼とした荒地。

そういえば何か焦げたような匂いも。

「あそこは、昨日は林だったところだね。何で？ どうして一晩でこんな事に」

助けを求めるように向いた先にいる従者の顔を見てクロードはごくりとつばを飲み込む。

「ラドビアス？」

「クロードさまの精神衛生上よろしくないと思ひまして」

「だからって」

「これで見通しがよくなりました。さあ、行きましょう。魔獣も我々を見つけやすいでしょう」

晴れ晴れと語るラドビアスに二の句が告げない。

祭りの晩は恋人が思いを育むんじゃないかったのかよ。 昨日の晩

はいきなりあがった炎にさぞかし大騒ぎだったのだらう。

何があったのか。

考えたくない、クロードだった。

6 砂漠からの風（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になっております。

名前が今と変わっております。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・・ベオーク時代 「カルラ」その後「イーヴァルアイ」

ラドビアス・・・ベオーク時代 「サンテラ」その後、「ラドビアス」

6 砂漠からの風

(六)

吹き付ける風が熱を持っている。

砂漠からの挨拶の一端なのか。

それとも異郷に踏み入る者への威嚇なのだろうか。

焼けるような痛さを頬にもたらした一陣の風に驚いて、クロードは後ろのラドビアスを伺うように見る。

「ラドビアス、今の風は？」

「ああ熱砂の風と言われる物ですよ。もう、そんな風の吹く土地に入ったんですね」

ラドビアスは感慨深く言うと、通り過ぎていった風の軌跡を目で追った。

「ここは、西側と東側の文化の境目なんですよ。地域的にも西側の国からハオタイ皇国になります。ハオタイの首都キータイに入る前に砂漠がありますからね。そのせいでしょう」

「ハオタイ？ そうか、ハオタイに入ったんだ」

目指すベオーク自治国はハオタイ皇国の一部だ。その、ハオタイに足を踏み入れたことに嬉しさを感じてクロードは歩みを速める。「ハオタイと言っても、この国はこの大陸のほとんどを占める広大な国ですからね。ここなど、まだ西側の方が近いくらいですよ、クロードさま」

「そうなの？」

ラドビアスの宥めるような言葉に、少し落胆して立ち止まったクロードを追い越してラドビアスが先に行く。

「ここは、わたしの故郷なんですよ」

ぼそりと言ったラドビアスの一言。

「だってラドビアスはベオーク自治国の人じゃないの？　ベオークからレイモンドールに来たんだろう？」

ええ、とうなずきながらラドビアスはクロードに答える。

「ベオークに行く前に、十歳までわたしはここで暮らしていたんです」

ラドビアスは、街を少し外れた大きなお墓の前に立つ。

古くて文字さえ、消えかかっている黒曜石に彫られた名前。それを懐かしそうに指でなぞる。　そ

「何て書いてあるの？」

「クラブ・ア・ガイン・ゴラハト、そう書いています」

「知り合いなの？」

「はい、クラブ・ア・ガインはわたしのいとこです。ここの領主になったようですね、良かった」

立ち上がって大きな墓廟を見上げる、ラドビアスの様子にクロードはなかなか話しかけられなかった。　朽ちそうな昔の領主の墓に立つ彼の心情はどうなのか。

クロードには推し量るのも難しいが。　知り合いなど全て歴史の中に埋もれるほどの昔。　彼はその時代の人なんだ。

知っていたが、実感が今までわいてこなかった。　だが、この砂に埋もれてしまうのではないかと思うほどの古い墓廟に眠る人と生きていた　一気に時間の波に飲み込まれていくような錯覚の中、クロードはただ、佇む男を見ていた。

「彼は、わたしの母の兄のこどもでした。二つ上で仲が良かったんですよ」

唐突にラドビアスが話し出してクロードは、彼が過去に戻っているのだと思った。

遙か昔、五百年以上前のダルファンに。

「ラドビアス！ どこ？」

茶色の髪を編みこんだ少年が、開放的なアーチ型天井から伸びる柱の間を縫いながら走っていく。

「ラドビアス？ 降参だよ、早く出て来いよ」

降参の声にくすくすという笑い声がして。声を頼りに少年は天井を仰ぐ。すると少年の鼻の先へストーンと褐色の髪の少年が飛び降りてきた。

「なんだあ、上に隠れてたんだ」

「下ばかり見てるから見つけられないんだよ、クラビア」

偉そうに笑う自分より二つ下の少年をがしりと捕まえるとクラビアは、脇に手を伸ばす。

「兄さんにそんな偉そうに言うやつはこうしてやる」

「わああ、やめて、やめて、ごめんなさい、クラビア」

こそばされて体をよじりながらラドビアスは必死で自分を拘束する腕から逃れた。

「ねえ、侍女たちが探しに来る前に部屋に帰ったほうが良くないかな」

「ラドビアスはまじめちゃんだな。でも怒られるのは僕も嫌かも。じゃあ帰ろうか」

「うん」

二人の少年は長い回廊を奥へと進んだ。

ハオタイの西の端、ダルファンはハオタイ皇国に多いハオ族と違

い、西側と同じアーリア人の多い地域だった。話す言葉も西側の国で使われている古代レーン文字から発展してきたアーリア語である。勿論、公用語はハオタイで使われている藩語なのだが、市井の者などそんな事は知る由もない。

しかし、この砂漠近くのダルファンを支配している一族の長、アウバル・ガイン・ゴラハトの屋敷に住むことにおいては、しっかりと藩語も習っているはずだろう。

長男のクラビア、そしてアウバルの妹の息子、ラドビアス。二人はこの支配階級に属しているのだから。

長めの金糸で隙間なく刺繍された袖なしの上着にゆったりとした裾を絞ったズボン姿の二人の少年。彼らは、自室の部屋の長いクッションにごろりともたれながら銀の皿から葡萄の粒をちぎっては口に入れていた。

「きみは、このままこの領主になるんだろうなあ。でも僕は？僕は何をしたらいいんだろう」

ラドビアスの指から葡萄の粒を奪い取ってクラビアは、もぐもぐと口に入れる。

「ぼくの手伝いをすればいいじゃないか。嫌なの？」

「嫌じゃないけど」

ラドビアスは、そう言うと顔を逸らした。

「僕は 父無し子だもんな。何でもみな母さまにあんなに寛容なの？ 僕だつてとても大事にされている。だけど母さまは結婚もしていないのに僕を産んでさ。それってやっぱり人の道に外れているよね」

ラドビアスの真剣な顔にクラビアは、持っていた葡萄の房を皿に置いた。

「父親が誰だとかは、ぼくも知らないけど。ラドビアス、おまえはぼくのいとこじゃないか。誰が悪口を言うのもぼくが許さない。だから安心していいんだよ、ラドビアス」

「ありがとう、クラビア」

なんとなく、じんときて二人は手を取り合う。

僕はここに居ていいんだ。ここに居てクラビアを助けていく。

ラドビアスは胸が詰まったような苦しい、でも嬉しい、そうこれは嬉しいんだと、目の前のいとこを見つめた。

しかし、感動の場面はいともあっさりと終わりを告げる。

いきなり、大きな衝撃音とともに窓枠を大きくぶち割っておおきな物体が飛び込んできたのだ。

「な、何」

手を取り合ったまま、二人はじりじりとあとずさる。怖くて背中を向けて逃げることもなんて出来ない。

うずくまった物体がゆっくりと体を伸ばした。そう、ぐんっとおおきく伸びをしたのだ。

「豹？」

ラドビアスの声に応えるようにそれは喉を鳴らした。雪のように白い大きな、実際、ラドビアスは豹など、図書館にある図鑑で見えたことなどないが。

それにしても大きな体だ。そして、口からはみ出すほどの牙が見えている。

「おまえがダリアか」

一瞬、誰が声を出したのか分からなかった。

「おまえがダリアか」

同じ台詞を豹が……口にした。

「た、助けて」

クラビアは泣きそうな、いや、もうすでに泣いていた。泣きながらラドビアスの手を振り払って部屋の隅に逃げて行く。しかし、

ラドビアスはその豹が言った名前に反応して一歩踏み出した。

「ダリアは僕の母だ。おまえは何者？」

「我は、使者だ。ダリアとダリアの息子を迎えにきた」

「迎えにつて、どこへ」

「我の主人の元へ」

訳がわからないが、とにかくこの豹は害をなそうとするわけではないようだった。尚も質問をしようとするラドビアスは、大きく扉を開け放って入って来た警備の兵たちによって引き離されてしまふ。

「ラドビアス様、お早くお逃げください」

「待つて、違うんだ。この豹は使者なんだ」

ラドビアスの声は大勢の兵士の大声と豹が吼える声によって掻き消える。

猛然と兵の中に踊りこんだ豹は、その大きな牙で次々と喉笛を噛み切つていく。

俊敏な動きに兵士の誰もついていけない。

「やめて！　ねえ、違うんだから」

叫ぶラドビアスの目の前に出来ていく死体の山。　叫んでいたのはほんのわずかな時間だったのか。　気がつくと豹は、返り血を浴びて真つ赤に染まった体を軽々とラドビアスの方へ運こんできた。

「ダリアのところへ行く」

これ以上被害を出すわけにはいかないし、ラドビアスが逆らえるわけもない。

「わかった」

歩き出すラドビアスの背中に小さくかかる声。

「ラドビアス、行くな」

「大丈夫、話をするだけだから。待つてて、クラビア」

「……ラドビアス」

「どうなったの、それで？」

ラドビアスが黙った途端に問う声。 さっきまでの態度を変えてクロードは勢い込んで尋ねる。

「あれきり、ダルファンには帰れなかったんですよ。ベオークに着いたと思ったら、ユリウスさまの姉君ハイラさまに捕まって危うく食べられるところで。そこをバサラさまに助けられたんです。それが縁でわたしは、バサラさまにお仕えすることになったんですよ」

「じゃあ、誰の使いだったのか分からなかったの？」

「ええ、母は何も教えてくれなかったんで」

「お母さんはどうなったの？」

「さあ、いずれにしてももう死んでいます。ベオークについてから生き別れて音沙汰もなし。あれから五百年以上経っているんですよ。何があったとしても大昔の事です」

そう言ってラドビアスは、もう一度墓石にそつと触れた。

「だけど、こどもを食べちゃうってユリウスの姉さんってどんな奴なんだ？」

クロードは気味悪そうに聞く。

「ハイラさまですか？ 一言ではとても言えませんが。破格な方です」

「って、どういうこと？ そう聞きたかったがラドビアスはさっさと歩き出した。

「それと」

「それと 何です？」

クロードは、目の前でくつろいでいる魔獣を指差す。

「おまえたち、しゃべれるんじゃないのか？」

アウントウエンは軽く顔を背けて小さく炎を吐いた。 サウンテ

イトウダは大きく口を開けてぐわつと一声出すと頭をヒラヒラと横に振って見せる。

「うーん、結局どっちなんだ？」

知らん顔をする二頭の魔獣を見ながらクロードは考え込む。
果たしてしゃべることが出来たほうがいいのか、否か。

そこへ、また砂漠の風が吹き抜けて行った。

7 二つの竜印（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になっております。

名前が今と変わっております。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・・ベオーク時代 「カルラ」その後「イーヴァルアイ」

ラドビアス・・・ベオーク時代 「サンテラ」その後、「ラドビアス」

7 二つの竜印

(七)

とうとう、その時が来たのだ。待ちにまつた瞬間が。

クロードは、自然に湧き出した温泉に足をそっとつけながら後ろにいるはずの男の様子に全神経を集中させる。

「あちつ」

思ったより湯の温度が熱くて、大きな声をあげてしまう。

「大丈夫ですか」

駆け寄ろうとする従者の気配に、クロードはあわてて声をあげる。

「だ、大丈夫。は、早くラドビアスも服を脱いでおいでよ。結構慣れると気持ちいいからさ」

何が見たいってクロードはラドビアスの裸の姿が見たいのだ。

お湯が大きく揺らいでラドビアスが入って来たことが分かり、クロードの緊張も高まる。

「ああ、本当ですね。少し熱いですがいいお湯です。このところ、水浴びだけでしたから気持ちがいいです」

後ろを振り向かなきゃ。ええと自然に振舞え。 ゆっくり……。

「クロードさま？」

クロードの気持ちなんかに関係なくラドビアスがいきなり、そういきなり回り込んだきたのだ。

「ラ、ラドビアス、な、何？」

「何って、はい、綿布ですよ。体こすってください」

「あ、ああ」

湯気に邪魔されて良く見えないが左胸には何の痕跡も無い。それは、そうだ。自分の胸元に目を移してクロードは目を伏せる。

ユリウスのしもべである証の竜印があるわけもない。彼は死んだのだから。

「おれが……殺した」

もう、酷く落ち込むことなんて無いと思っていたのに。彼を失った悲しみと自分の犯した罪は、引いていたかと思うと自分を飲み込むほどの大波になって帰ってくるのだ。逃げられない。否、逃げてはいけない。だけど おれは。

彼を愛していたのに。 兄だと、家族だと、ユリウス、おれはもつと君にいろいろ教えてもらいたかった。それだけじゃない。

「魔術だけじゃ……ない」

「クロードさま」

ラドビアスの気遣う声にクロードは、はっと深い意識の奥から引き上げられた。

「どうか、しましたか？ 気分でも悪いですか」

自分に伸ばされた手をやんわりと振り払ってクロードは、思いついたように大声を出す。

「ねえ、ラドビウス。背中流してあげるよ」

「なんか企んでるんですか、クロードさま。でも遠慮なくそうさせていただけだと思います」

でもその前に、とラドビウスはクロードの背後に回った。

「先にクロードさまの背中を流してからにします」

「おい、それじゃあ見えない」

「見えない？ 何がです？」

口をすべらせたときクロードは気づいたがすでに言った後だ。言

葉は自分の口には返らない。

「いや、なんでもないよ」

乳白色に濁った湯の中で大人しくラドビウスに背中を流してもらいながらクロードは、ふと考える。

ユリウスってよく、ラドビウスにおまえなんか嫌いだと言ってたけど。 本心じゃないよな。 だったら、あんなに長く一緒に

いられないよな。何が気に入らなかったんだろう？

「ラドビアス？ おまえユリウスが嫌がることをしたことがあるの？」

え？ とラドビアスはいきなり降って来た謎の質問に背中を流す手を止めた。

「何の事ですか」

「あのさあ、ユリウスっておまえへの扱いが結構酷かったじゃないか。どうしてなのかなと思ってさ」

ああと安心したかのような笑顔になってラドビアスは作業を再開する。

「あれは、わたしに甘えていらしたのでしょ。あの方の側近で歳が上なのはわたしぐらいですからね。それにわたしはしもべなんですから別にどう扱われてもいいのですよ。そんなことではなく……」

「何？ ラドビアス」

急に黙りこくった相手に驚いてクロードは後ろを振り向く。

「どうしたの？」

「主は、ユリウスさまはわたしのこの顔が気に入らなかったんですよ」

「ええっ？」

顔って言っても、紅顔の美少年っていう歳でもなく、白皙な美青年でもないが。ラドビアスの顔が悪いとは思わないんだけど。

派手な顔じゃないけど落ち着いた大人の顔だ。

安心できると、頼みになると思わせるような穏やかな顔。この

どこが嫌なのかクロードにはさっぱり分からない。

「何か理由があるの？」

「さあ、顔の好みだけはどのこののと言ってても仕方ありませんからね」

ラドビアスは、口元を緩めたがクロードには笑っているようには見えなかった。なんだか泣いているような。この話には何か理由があるのだと分かってしまったが、強引に聞くわけにもいかない。

＊

きまずい空気の中でいつの間にかクロードはのぼせてしまっていたようだ。気が付くと、広い岩場の上に敷いた毛布に寝かされている。

「あれ？ おれどうしたの」

「ユリウス、最低と仰りながら倒れておしまいになったんですよ。はい、お水」

上半身を起こしたクロードにすかさず、水の入った水筒を渡してラドビアスは、クロードの腕に触れる。

「だいぶ、ほてりもおさまりましたね。魔獣たちも待っているでしょうから、戻りましょうか？」

「うん」

結局、何も分からなかった。

ユリウスが死んで竜印が消え、他の竜印を受けていたしもべは皆消えてしまったはず。ところが ラドビアスだけは生きているのだ。 バサラが生きているからなのか。

ユリウスの兄、バサラは自分がこの護法神の剣で殺したと思っていたが。 違うんだろうか、ラドビアスの最初の主人はバサラだった。 彼の竜印が残っている。 そういうことなのか。

黄みがかった白い肌に浮かぶ、龍の形。

前に見た、バサラのしもペインダラの背中にあつた龍印。 それがラドビアスにもあると。

それを確かめたかったのだ。

「ラドビアス、おまえ誰に仕えているんだ？」

「それは、もちろんクロードさまですよ」

「じゃなくて、おまえが今生きているのはなぜなのかと聞いているんだ。 おまえ、五百歳は軽く超えているんだ。 何か理由があるはずだろう」

「それは……」

言いにくそうにラドビウスは続ける。

「バサラさまの印が　わたしには残っています」

やはりそうか。　バサラはまだ生きているんだ。

思わずクロードは唇を噛む。　ユリウスが命を投げ出したのに。

彼が死んでバサラが残ったなんて。　だけどだからラドビウスも生きているんだ。　失ってしまったものと取り留めて置けたもの……

……どちらかを今更選べもしない。　おれにとってラドビウスももうすでに失いたくない、絶対に。　そんな存在なんだから。

「おまえにとつて竜印を受けた主人ってどういう存在なんだ？　ガリオールやルークは、絶対無二の存在だと言っていた。　竜印を受けたしもべは、主人に絶えず惹かれ続けるのだと。　おまえはどうなの？」

「わたし　ですか」

投げられたクロードの問いにラドビウスは、困惑の面差しを向ける。

「ユリウスさまをずっと想ってまいりましたが。　バサラさまもわたしには大事な方です。　命をお助けいただいてもべにして頂いたのですから」

「でも、それは理屈のつかない思いとかじゃないだろ？　竜印って理屈で好きとか嫌いとかじゃないはずだろ？　その感覚はおれにだつてわかるよ。　おれだつて少しの間だつたけどユリウスの竜印があったんだから」

一つに結び合っているような、鎖とかそんなものでなく、暖かい物でつながっている。　いつもユリウスのことが頭にあって、彼のこと気がなつて……。　しかし、このところ前よりは顔色が戻ってきたラドビウスは身の内に二つの竜印を持っていたのだ。

二人を主人に持っていた彼はどちらを優先していたのか、いないのか。　果たしてそんなことが出来るのか。

「それは　わたしにも分かりません。　ユリウスさまをお慕いする

気持ちに偽りはありませんが、バサラさまにも逆らえない。でも、抗えない、そういうのでもない。わたしは他の僕とは違うのかもしれないですね」

苦しそうに言うラドビアスにクロードは、もう何も聞くことができない。何百年経ったところで、知りえないことはあるのだ。一番それを知りたいのはラドビアス自身なのだから。

*

「クロードさま」

「何？」

「いい加減、服着ませんか？」

ラドビアスの言葉に我に帰るとクロードは自分が素っ裸だったことを思い出す。別にラドビアスに見られたことが無いわけじゃないが。気づけば自分だけ裸ってなんか。ずるい」

結局、おれはラドビアスの裸を見られなかった。いや、見たかったのは、裸じゃなかったんだがこの際、問題は裸だ。

「もう、一回温泉入ろう」

「はあ？」

「今度はぶっ倒れないぞ」

「何の宣言ですか、それは」

「だからさあ」

「嫌です」

二人の問答は待ちきれなくなった魔獣がやって来るまで続いた。

8 雪だるま（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になっております。

名前が今と変わっております。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・・ベオーク時代 「カルラ」その後「イーヴァルアイ」

ラドビアス・・・ベオーク時代 「サンテラ」その後、「ラドビアス」

8 雪だるま

(八)

広大な美しい枯山水の庭。 陽の光を受けて眩しく光る、池を模して敷かれている石は大小の青玉。 道を表す白い小さな石は加工された大理石。 そこにあるものは、本来ならば屋敷の中に大事に置いてあるような高価な品ばかり。

だが、あたかも普通の砂利のように扱われている。 それも今は一面、白い雪の覆いがかかっているせいで見えはしないのだが。

ベオーク自治国はハオタイ皇国の首都から北へ僅かに逸れた高地にあるため、冷涼な国である。 そのため教皇の正装は、雪豹の毛皮のついた分厚い外套を羽織ることになっているほどだ。

そして季節は、新年を迎えた頃。 ピンと張り詰めた糸のような寒さがベオーク自治国の宮殿、朝陽宮にも遠慮することなく隅々まで入り込んでいる。 しかし、教皇の一族の居室は、張り巡らされた結界によって寒さとも無縁の暖かさなのだ。

一年を迎える新嘗祭の宴が行われている大広間の近くの一室。 そこには、いつも大陸のどこかへ出かけていたり全員集まることはない教皇の一族が集まっているせいで、彼らの随従たちも久しぶりに顔を合わしていた。

「あらインダラ、お久しぶりね」

「シヨウトラか」

「ハイラさまが大陸の南へお出かけになっていたから、ここに戻る

のも一年ぶりなのよ。もつと嬉しそうにしてもいいじゃない」

「なんで嬉しそうにしなきゃならないんだ？」

さも、嫌そうに細い目を一層細めて、四男バサラのしもべ、インダラは横を向く。相手にされていないのも一向に気にするでも無く、次女ハイラのしもべ、シヨウトラはその太くて短い首を傾げてみせた。

その仕草は、少女や、妙齡の女性であつたなら、思わず笑みがこぼれるものだったろうが、やった人物が悪い。

しもべは主人に似るものなのか、ハイラを主人に持つシヨウトラは、驚くほどがっしりとした身体をしていた。主人であるハイラは女性であるのだが、外見はそこの兵士などよりもよほど男らしい肉付きをしていた。そのため、激しく女物が似合わない。そのしもべであるシヨウトラは男である。元来魔道師には女性はなれないのだから当然なのだが、主人を上回るたくましい体を持つしもべの心は女だったよう。それが問題といえは問題なのだ。

しもべは、主人に自分の所有であることの証、龍印を施されて不老と不死に近い体になるが、影響はそれだけでは無い。彼らは龍印を体に刻み付けられた時点から身も心も主人の物なのだ。いつも主人の事を想い忠義をつくすようになっていく。

が、シヨウトラの興味は他の男たちにも向く傾向があつた。

バサラのしもべであるインダラもサンテラもこの時にはまだ龍印は刻印されてはいない。だが、だからといって、インダラがシヨウトラを受け入れるはずも無いのだが。

「ねえ、インダラこの後暇？」

「おまえに向ける時間なんてあるわけがない。気持ちの悪いことを言うのはやめてくれないか」

自分に無いものを求めるのか、シヨウトラは細身の男が好きらしい。媚びた視線に耐え切れず、インダラは座っていた椅子から立ち上がると、窓辺に凭れていた男の方へ行く。

「あいつ、どうかしてくれよ。気色の悪いことつたらないぜ」

「……なに？」

インダラに話しかけられた男は、外の様子に目を奪われていたせいか、インダラの話についていけずにおざなりの返事を返す。

「聞いてなかったのかよ。で、何を見ていた？」

インダラが窓をのぞく。そこにいたのは、亜麻色の髪を肩下に流した黒の絹地に金糸の刺繍を施した豪華な式服を着た、まだ十歳くらいのこども。式典に退屈したのか抜け出して庭で遊んでいるらしい。

「あれは、カルラさまだな。この宮でこどもなんてカルラさまか、ハイラさまの食事しかないからな」

「お寒くはないのかな？ まだカルラさまにはしもべはいないけれど、御つきの者はいるだろうに」

そう言うが早いか、インダラの横にいる男は窓を飛び出していく。

「おい、サンテラ。待てよ」

言うてはみたものの、追いかける気も無くインダラはやれやれと肩をすくめる。

「カルラさまがお可愛いのは認めるが、あの執着はどうかと思うぜ。わたしには分からないな。わたしは、やっぱりバサラさまがいいし」
呟きながらインダラはまたも目を細めて窓の外を面白そうに眺めた。

*

「風邪を召しますよ、そんな薄着で外にお出ましになられては」
しゃがんで一心不乱に雪を固めていたこどもが顔を上げる。

「おまえ兄さまのしもべの一人だな」

「さようでございます。サンテラと言います」

「ふーん、おまえ、雪をたくさん集める」

大人に見つかったのにまるで驚くでもなく、そのこどもは声をか

けてきた男にそれだけ言々とまた作業に戻る。

遊びを止めるように言うつもりだったサンテラだったが、仕方なく雪だるまを作る要領で転がしながら雪を集め出す。

こどもの背丈ほどの雪玉を三つほど作って、今も作業に没頭中のこどもの元に転がしていく。

「このぐらいでよろしいですか」

「……おまえっ」

顔を上げたカルラの強い声に叱責を受けるのかと思ったサンテラだが、その顔に浮かんでいたのは歓喜の表情。

「これ、おまえ作ったの？ どうやったの？」

「はあ。こうやって転がしただけです」

あまりに子供らしい反応に口元が緩むが、そこはぐつと堪えて真面目な口調でサンテラは先ほどやったように雪玉を作っていく。

と、雪玉に手をつくサンテラの横に伸びる手。

「わたしもやる。転がせばいいんだな」

「はい。でもお手が冷えますよ」

「うるさい、黙ってやれ」

いつの間にか、カルラと二人してそこら中の雪を集めて巨大な雪玉がいくつも庭に出来ていた。

「たくさんできましたね」

腰に手をやりながら、薄っすらとかいた汗を懷から出した綿布で拭っていると、こちらを見上げて笑うカルラと目が合う。

サンテラの主人、バサラの十歳年下の同腹の弟。初めてバサラにサンテラが会った時にこのこどもはそっくりだった。あのときも自分はバサラの美しさに驚いたものだったが。

こうやって弟を見ても同じようにサンテラは、感嘆のため息をついてしまう。しかし、バサラに対しては感じなかった気持ちがかにカルラに対してはある。そのことに前から気づいていた。

動いてほかほかしていた体が急速に冷えていくのを感じて、サンテラは急いで上着を脱ぐとカルラに着せ掛ける。

「恐れ多いことを申し訳ありませんが、部屋にお戻りになるまでこのままでご容赦ください」

「ふん、重いな。靴が濡れて冷たい。おまえ、わたしを部屋まで抱いていけ」

尊大な口をきいて手を差し向けて見上げるそのすがたは、なんとも愛らしいのにと、サンテラはまたしても口元が緩むのだった。

軽々と自分の服ごとカルラを抱き上げて庭にある東屋に向かい、中にある椅子にカルラを降ろす。

「濡れた靴を脱がせますので失礼します」

「早くしろ」

式服と同じ絹張りで刺繍が密にしてある靴は、冷えてぐつしよりと濡れて肌に張り付くようになっていた。これではあかぎれになっってしまうだろう。靴を脱がせて自分の服の内側で丁寧にぬぐう。

一連のサンテラの行動を見ていたカルラが焦れたようにサンテラの首に手を回してきた。

「もういい。早く連れていけ」

「かしこまりました」

もう一度綿が入っている上着を着せようとすると、カルラにはじかれてしまい、驚いたサンテラが問うように見る。

「おまえが寒いだろう。おまえが羽織ってわたしと一緒に抱き込めばいいだろうが。頭使え、頭」

「それは」

「なんだ、わたしと一緒に服にくるまるのは嫌か」

上目遣いで心配そうに見上げる顔は、言葉ほど大人ではない。

嫌なのかと兄のしもべ相手に気を使うすがたに湧き上がる感情。

そうだ、わたしはこのお方がいとおいしいのだ。バサラに感じている信頼、尊敬、親しみと言う名の物とは違う感情。立場を忘れて抱きしめてしまいたくなる。頭を撫でてこども扱いしそうになるのをぐつと堪える。

「いえ、カルラさまが仰ってくださいたなら喜んでそうさせていた

「いただきます」

「じゃあ、そうしろ」

「はい」

しっかりと首に手をまわしてくるカルラを抱き上げて、上着ですっぽりと包むとサンテラは歩き出した。

「おまえの匂いがする」

ぼそりとつぶやく声。

「ご不快でしょうがもうしばらくお待ちを」

「不快じゃない」

「……そうですか」

笑顔のまま、カルラの部屋に戻る二人の前に回廊の先から現れた人物が声をかけた。

「おや、その腕の中の物はなんだ、サンテラ」

「兄さま」

いきなり足をばたつかせて落ちるように転がりおりたカルラが裸足のまま、その人物に抱きついた。

「カルラ、式典の途中からいなくなったので心配したよ。何をしていたの？」

ひよいと弟を抱き上げると、カルラは嬉しそうにバサラにしがみ付きながら彼の耳元でささやいた。

「そう？ 雪で？ それは楽しそうだったな。兄さまも今度は誘ってくれよ、カルラ」

笑いながら頭をなでて、視線はサンテラに向ける。

「カルラはわたしが部屋まで連れて行く。ご苦労だったな、サンテラ」

「いえ、それではよろしくお願いします。靴はあとで用人に渡しておきますので」

頭を下げるサンテラに思いもしなかった声が聞こえた。

「おまえ、またやろうな。楽しかった。おまえは良い匂いだし」「匂い？」

「うん、抱いてもらつてるときに　良い匂いだつたよ」

「兄さまとどっちがいい？」

「え？」

カルラは、子供っぽい質問をするバサラに驚き、ちらりとサンテラの方を向いた。見つめるサンテラと視線が寸の間絡む。

「兄さまに決まつてるけど、何でそんなこと聞くの？」

「だってカルラの一番は兄さまでいたいからだよ」

バサラの言葉にカルラは嬉しそうに納得の表情を見せた。

「わたしの一番は兄さまに決まつてるよ。誰よりも好きだもの」

そう言つて縋りつく弟を抱く手にわずかに力を加えて、バサラは唇を引き上げてサンテラを見た。

なんで、こんな目をするのだろう？　まるで、見せ付けるような。

その時は気づかなかつたことが、今では分かる。バサラはあの時からすでにカルラを自分のものにすることに決めていたのだ。

女性にすることを。自分の妻にすることを。カルラが自分以外に目を向けることが無いように、自分のしもべさえけん制の態度を取っていたのだ。

そこまでしてもバサラの計画は成就しなかった。人の心は縛れない　そんな簡単なことが、彼には分からなかった。

「あの雪の日は楽しかったな」

窓から見える重たい雲から落ちてくる白い粉雪を見ながらラドビアスはつぶやく。

「え？　雪？　雪が降つてきたの？　わーい、積もったら雪だるま作ろう」

雪という言葉に反応して窓際に寄つてきたクロードが、十六歳と

も思えないほど、はしやぎながらラドビアスを見上げてくる。
「そうですね、たくさん作りましょう」

ラドビアスは満面の笑みでそう答えた。

9 願望 前編（前書き）

この回は前編と後編に別れています。
長くなってすみません。

「レイモンドール綺譚」の外伝です。
一話一話、独立した話になっております。

名前が今と変わっております。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・・ベオーク時代 「カルラ」その後「イーヴァルアイ」
ラドビアス・・・ベオーク時代 「サンテラ」その後、「ラドビアス」

9 願望 前編

(九)

おまえの望みは何だ。

叶えてあげると言ったらおまえはどうする。

でも、それは 本物ではない……。

「この先の山に登るのは止めたほうがいいぜ、旦那」
「だめなの？」

呼びかけた男の側にいた少年の問いかけに獵師の男は、重々しくうなづく。

「ここは、靈山だ。この奥にある泉に願をかけると願いが叶うという噂がたつて、何人もこの山に入った人間がいたが」
「どうなったの？」

興味津々といった少年を、厳しく咎めるように咳払いをした獵師は先を続ける。

「ある者は、半月も山を歩き回ってほとんどの記憶を無くしていたし、だいたいのは者は、泉の存在など確かめる間もなく、山に住む狼か、野犬に食い殺されてしまう。少し遠回りになるがこの先を迂回したほうがいい」

「狼がいるんだ、ふーん、どうする？」

「時間がかかるのは嫌ですね。ここを行きましょう」

「おい、おまえ。人がせつかく忠告してやったのに」

獵師が大声でどなるのを目の前の青年は虫を追い払うように手を振る。それでも口調はどこまでも丁寧で。

「ご心配ありがとうございます。先を急ぎますもので、この道を行かせてもらいます。あなたからそのお話を伺いましたので、充分注意しながら行く事ができます。では、失礼します」

ぽかんとする獵師を尻目に青年は、行きますよと少年の背中に手を置く。話を聞いていたはずの少年さえ、怖がる素振りも無い。

まったく、語り継がれている事に耳を貸さないと困ったものだ。そういう類の話には何かのわけがあるものだ。

「わしは確かに教えてやったんだからな。あの世で後悔するんだな」
彼の中で、あの二人は死んだも同然だった。肩をすくめながら獵師は、尻尾を丸めて動こうとしない自分の犬たちに目をやる。

「どうした？ 何をそんなに怖がっているんだ。まさかわしの話に驚いたのか？」

その近くに異形の物がいた事に彼は気づかなかった。狼なんかより、野犬よりもやつかいかもしれない。少年の連れが。

誰も通らないと言われるだけあって、道はもう道の形状をとどめていない。獣道のような道。先に行くアウントウエンが目の前の枝を小さい炎で焼いていく。枝くらい自分たちには何の障害にはならない。これは、クロードが怪我をしないようにとの魔獣なりの心遣いらしい。靈山に対しての畏敬の念などないのだから。「狼かあ、アウントウエン、出て来たら一緒に遊ぶ？」

その気持ちを知っているのかと、クロードの言葉に赤い魔獣は、ばかにすんなよというように一声吼える。彼といえは、あははと笑ながら鬱蒼と茂る広葉樹の中に行く。だいたい、クロードやラドビアスが前にいたレイモンドル国。そのハンゲル山にしても靈山だった。禁忌の山というところなど、彼らに恐れる理由などない。禁忌とされる理由があるにしても、それが何かという疑問がわくだけ。恐ろしいなどと思うクロードたちでは無かった。と、いうより自分たちこそがまさに恐ろしいもの、であるのかもしれないのだから。

ラドビアスが、疲れたとうるさいクロードに根負けして、途中から二人は魔獣に乗って居た為あつという間にその山の頂上近くに着く。

だいぶ上に来たようで、景色は一変している。下では褪せたような色だったのが、ここの広葉樹の葉は、目もくらむほど紅葉していた。何か別の場所にいるような。山が隠してきた自分の宝をつかの間見せびらかすような、感嘆する言葉しか見つからない。そんな風景にクロードもラドビアスも魔獣から降りるとしばらく声も無く見つめていた。

しばらくして何かを促すようなサウンティウーダの声。耳を澄ます、ラドビアスとはかすかな水音に気づく。

「喉が渴きませんか？ クロードさま。近くに水場があるようです。待っていてください、汲んできますから」

「早くね、喉からからだよ」

クロードの返事に、わかっておりますと笑いながら応えてラドビアスは、音のする方へ足を進めた。

乾いた落ち葉を踏む音が次第に湿り気を帯びてきて、黄色や赤のカーテンをくぐるようにラドビアスは歩き続けた。くぐる度にどこか空気がしっとりとしているように感じる。どこか違う場所に入り込んでしまったという感覚。それを振り払うように頭を振ったラドビアスは、目の前の光景に思わず声を上げた。

「これは」

探していた水場だったが、目の前にあるのは、人為的に作られた物だった。壁は石で補強されていて、竜の口から透明な水があふれ出ている。その前に広がる丸く石積みで作られた小さな泉。

これが獵師の言っていた泉なのか。

もっと神秘的なところかと思っていたラドビアスは、自分の思いこみに笑みを浮かべた。昔、旅人のために作られた水場だろうと見当をつけて、その透明の水を水筒に移す。

「なんと言っていたのだったか、あの獵師は」
「確か願いが叶うとか。」

「ばからしいと笑う自分のどこかに、ここで言ってみようかと思っている自分がいた。」

自分の願い。

長命でもなく、普通の人間の自分。そして普通の人間であるあなたの方と出会う。

「ばかな、わたしときたら何を言って……」

心の中で言った自分の願いを即座に打ち消すように首を振った。そのせいだったのか、急に目の前が暗くなる。だめだと、そう思っているのに体はそのまま泉の中に倒れこんでいった。

*

次に彼が目を開けたのは、陽が暮れた後。自分が寝台に寝かされているのに気づいて、困惑気味に周りを伺うと亜麻色の髪が目に入る。

「起きたのか？」

「カルラ　さま？」

「何？」

自分が口にした名前に、覚えが無いことにラドビアスは首を傾げた。カルラとは誰だ？　それより自分は、誰だ？

「ここはどこでしょう？」

「どこって、どうした？　やはり頭を打ったんだな。おまえ、庭の噴水の所で倒れていたそうじゃないか。このところ忙しそうにしてたから、無理を重ねたのかもしれないな」

心配そうに見下ろす彼女は、ラドビアスの手を取る。

「ここは、ランゲルダー子爵の城だ。わたしは、ここの長女のエレン。庭の泉の側で妹がおまえを見つけたらしい。おまえは、執事の息子のラドビアス。父上が今年亡くなってから事務方で働く事にな

った。 まったく覚えてないのか」

わずかにハスキーなアルトの声に、ラドビアスは話の内容など何も入ってこなかった。 ただ、懐かしくて、嬉しい。 どうしてそう思うのかも分らないのに、胸が締め付けられるほどの幸福感にまたもや彼は戸惑う。

「おい、こら、何をばけつとしている？」

頭をはたかれて、ぎくりと目の焦点を合わすと、エレンと名乗った女性がもう一度ラドビアスの頭をこづく。

「おまえ、いい加減にしろよ……」

そこへ、盆の上に何か汁物をのせて十四、五歳くらいの少女が入って来た。

「姉さま、また乱暴な口きいて。 外まで聞こえていましたよ」

「聞こえたっておまえとラドビアスじゃないだろ」

ふんつと盛大に鼻から息を出してエレンは、それでも妹に自分の場所を譲る。

「わたしは、領主への上納金の遅延の釈明文を書かなきゃならないんだ。 もう執務室に戻る。 気分がいいなら後で来てくれ」

エレンは、もーと頭を抱えて見せて戸を開けてそう言つと、出て行った。

姉の言葉を受け、ラドビアスが体を起こす。 驚いてシャロンは押しとどめようとするが、それを片手で止めてラドビアスは起き上がった。

「熱は無いようですし、エレンの部屋を教えてもらえますか。 書類を書くくらいなら、お手伝いできると思います。 記憶はやはり戻ってきませんが」

「……わかったわ」

シャロンは、困りながらもうなずいた。

部屋をノックすると、うるさいと中から一喝された。 それだけでシャロンは、申し訳なさそうに、引き返そうとしたが、ラドビアスは構わず、戸を開ける。

「おまえ、だめだと言つたろう。今は忙しいんだから」

言いながら振り返つたエレンは、相手がシャロンではないのが分つて表情をやわらげた。

「いいのか、もう」

「それを 見せてもらえますか？ お手伝いします」

強引に奪うように書類を取り上げると、ラドビアスはさっそくエレンの横に座ると書類に目を通し出す。

「これは、結構余分なものまで上納要求されているようですが、訳をお聞きしてもいいですか」

「それは、前年度足りない分も加算されているせいだろう。おまえ、ぜんぜん思ひださないのか。他人行儀だな」

「はい。それより、二年前の時点では、この土地には三分の比率でしか、計算されていないのに、前年からは二分の割り増しになっておりますよ。領地の地図と、請求額の書類を全部出してください」とラドビアスの目の前にドンと置いた。

「おまえ、急に仕事ができるようになったじゃないか」

「恐れ入ります。なんとなく分るんですよ」

「ふーん」

それでも何かいつもと様子がおかしいと、ラドビアスが書類に向かう間、真横でエレンは身じろぎもせず、彼を見ていた。今年から見習いのように事務の仕事をするようになったはずなのに、この幼馴染の青年の様子は、確かに おかしかった。

「何かわかったか」

「ええ、上納金はこの半分でも多いくらいです。叔父君の所領分まで払っているようですよ、エレン」

「か、貸せつ。どこだ？」

ここですと地図をしめした場所にエレンが手を伸ばしてにラドビアスの指に触れた。ラドビアスは自分が、主人の娘に敬称をつけていないのに気づく。ただ、自然に口をついて出たからだ。た

ぶん、普段のわたしも彼女を呼び捨てていたのだろうかと思っ
た。

しかし、そんなことをして失礼ではないのか。彼女たちと
わたしが幼馴染とさっき言っていた。それが関係しているのか？
頭でそんな葛藤をしていることをおくびにも出さず、ラドビアス
は、確認するようにエレンを見る。

「ここは、うちの所領だろう」

「いえ、この登記文書と照らし合わせてみると叔父君、バースタイ
ン男爵の所領ですよ。しかも、ここは閑地でしょう。所領とみなさ
れるほうが負担ばかり増える。そんな土地です。だから、わざと移
したんでしょう」

「くそっ、あのためき親父め」

「近くその場所に行ってみようと思います。実際見てみないとどう
とも言い逃れできますからね。しかしまず、この未処理の書類を
片付けていきましょう。なんでこんなに溜まっているんです」

「だって」

わけが分らないんだと、膨れるエレンにラドビアスは、一つ一つ、
封書を開けて読みながら説明する。なんで分るのか、自分でも分
からない。

結局、夜中すぎまで仕事をしたが、エレンに教えながらの作業で
そんなに容易く終わるものでは無かった。気がつく、彼女は机
に突っ伏して寝入っている。

まだ、十七、八の彼女にこの城と領地を守っていくことなど、至
難の技だろう。側に誰か、しっかりとした後見人がいる。

それが自分だったなら……いきなりそんな思いが沸きあがる。

もしかして、わたしはエレンに特別の感情を持っていたのかと思い
至る。慌ててその考えを打ち消して、ラドビアスは立ち上がった。

「エレン、寝るのなら寝室へ行きましょう」

「うっん」

起きないエレンにため息をついてラドビアスは、部屋の長椅子に

彼女を抱き下ろす。 エレンの部屋がどこか思い出せない。 だが、はつきりしていることがある。 わたしは、この少女に好意を持っている。 自分の上着をかけてやると、自室に戻ろうと廊下に出る。

長い廊下には、必要最小限の明かりしか無く、足元は暗い。 廊下に灯す蠟燭まで削っている姉妹の生活に、少しでも助けになりたいと彼はため息をつく。

それより、あのまま彼女を椅子で一晩明かさせる訳にもいかないと思い直し、ラドビアスは踵を返した。

9 願望 前編（後書き）

後編に続きます。

9 願望 後編（前書き）

これは、9の願望のつづきです。

9 願望 後編

朝、目を覚ましたエレンは、自分がラドビアスの寝台の中にいるのに気づく。部屋の主はどこなのかと、そう広くも無い部屋を見回す。すると、彼は部屋の隅で毛布を体に巻きつけるようにして転がっていた。

頭を打ったのか、ラドビアスは記憶をなくしているらしい。しかも、少し性格も違う。小さい時から知っている彼はもっと頼りないし、もっと砕けた性格だった。

いくら小さな子爵の屋敷といえど、もっと主従関係をはっきりするようにと父親に言われていたのを エレンは思い出す。その父親も二年前に起こった馬車の横転事故がきっかけで寝込んでしまい、同乗していたラドビアスの父親もその時亡くなった。気丈に後を継いで子爵家を維持しようとしていた母親も、今年父親が亡くなった心痛でとうとう倒れてしまう。自分がしっかりなくてはとエレンは、自分なりに仕事をする。

だが、今まで家の運営などやった事も無い彼女に何もできるわけでもなく、家計はどんどん悪化していく。使用人も僅かになり、そうすると屋敷はあつと言う間に痛む。城がどんなに維持にお金がかかるのか、生きていくのにはお金がかかるのか そういう事を彼女は初めて知ったのだった。

「エレン、お早うございます。あなたの寝室が分らなかったもので、すみませんがここにお連れしました」

「お早う。だったらそんな所で寝なくても一緒に寝台で寝れば良かったのに」

「え？」

エレンの身じろぐ気配に目を覚ましたラドビアスは、彼女の言葉に固まる。

「小さい頃はよくそうやって寝ていたじゃない。まあ、あとでおまへの父親にすっかり怒られたけど」

にっこりと笑う彼女の笑顔に、またもや胸が痛くなる。わたしは、こんな彼女の無邪気な仕草や言葉にいちいち胸を苦しくしていたのだろうか。たぶんわたしは、彼女が思ってる以上の関係を望んでいたに違いないのだ。それを隠して寝台に一緒に入るなんて、拷問に近い。

「あなたは、もう立派な女性なんですから、使用人、それも男性と同じ寝台で休むなどと言ってはだめです」

「ラドビアス」

お小言を言う彼の頬にエレンの平手が飛ぶ。乾いた音に驚いてラドビアスが彼女を見ると、エレンの目にみる間に涙があふれてきた。

「ばかやろう。何もかも忘れるなんて。じゃあ、あの約束も忘れたのか」

「約束……ですか。何を約束していたんでしょう？」

「知らないっ」

大声を出して駆け出そうとする彼女を止めようと思わず腰に手を回してしまい、ラドビアスはまずいと思ったが、今更手を離すのもおかしい。

「大事な約束だったんでしょ？　だけど頭を打ったせいで思い出せないんです。エレン、わたしとあなたでどういう約束をしていたのか、教えてください」

抱き込むような形になった後、しばらく逃げようとジタバタしていたエレンも諦めたのか大人しくなった。

「おまえは、わたしを……やっぱり、いい」

「わたしがあなたを、何です？　言ってください」

「覚えてないからって笑うなよ、ラドビアス」

「笑いませんから、何です？」

エレンは下を向いてぼそぼそと応える。

「わたしが十八になったら、一緒になると言った」

その言葉にラドビアスは、今度こそ本当に絶句した。

「笑われるのも嫌だけど、何も言われないなんてもつと酷い」

目を丸くして立ち尽くすラドビアスを睨み上げる彼女に、何と言ったらいいのか、答えが出ない。

その彼の首がいきなり引き寄せられる。暖かいものが自分の唇に触れて。それがエレンの唇だと気づくと、ラドビアスの中で何かが動き出す。一旦離れた彼女の肩に手を回して顔を近づけると、エレンはそつと目を閉じる。

ああ、わたしは、やはりこの人を愛している。

愛している。それで満たされた感情に彼は我を忘れて、エレンに深く口づけた。思い出したのではない。だが、自分の存在すべてが彼女を求めていた。こうなる運命だったのだと確信する思い。いや、願望か。

願望。その言葉にラドビアスは背中を冷たいもので撫でられたようにぞくりとした。

何度も交わす口付けに酔っていたエレンは、急にぴたりとラドビアスが口付けを止めたのを不満顔に見あげる。

「なんだ、急に」

気まずい雰囲気立ち込めて、エレンが突き飛ばすようにラドビアスから離れる。

「なんで、みんな忘れてしまっただ。ラドビアスのばかり」

八つ当たりのように音を立てて閉まる扉を見つめてラドビアスは、呆然としていた。

願望という言葉が、なぜか頭から離れないのだ。何か、その言葉に記憶の鍵があるのは間違いない。でも、それを暴いて、もしその記憶が思い出さないほうがいいと思うものだったらどうする。

このまま、エレンと共に生きて行くほうがいいのではないのか。彼女を愛している。その事だけは真実なのだと分っているのに。だが、一旦浮かんだ思いは無くならない。亡くした記憶。そ

の真実はどうだったのかということ。思い出せば全て終わってしまう……そんな予感がするのに突き止めずにはいられない。

エレンとの気まずい空気の中で、ラドビアスは恐るべき速さで仕事を片付けていく。仕事に没頭していると安心していられた。

昼食時になって意を決したようにラドビアスは立ち上がると、ある場所を目指す。

始まりの場所へ。

そんなに広くない屋敷の庭の片隅にそれはあった。だいたい、どこに比べて広くないと思ったのか定かじゃない。それなりに大きい庭だと思う。庭師も通いの年寄りだけになって、最低限の仕事しかしていないので、秋を迎えた庭は、落ち葉でうめつくされていた。

その鮮やかとはいえない黄ばんだ落ち葉を踏みしめた時、ラドビアスの頭の隅で何かチリリとよぎる。

噴水のある水場につくと、心を急かされるような感情に支配された。自分は何か、他に重要な事をしていたのではないか。どうすれば思い出せるのか分らないままにその水の中に手を差し入れた。途端に、雷に打たれたような痺れが手から全身に回ってラドビアスの記憶は、蘇る。彼が危惧したとおり、それは、今の彼にとつて嬉しいことでは無かった。

「ラドビアス」

そこにかかる、高い可愛らしい声。振り向くとそこに妹のシャロンが立っていた。

「また、ここにいたの？ お姉さまが探していたわよ。ここは、わたしだけのお気に入り場所かと思っていたのに、あなたもそうだったの？」

「ええまあ。それより、エレンが探していたとは？」

姉の名前だけに反応する彼を拗ねた顔で見ながらシャロンが澁々用件を伝える。

「ラドビアスったら、わたしだってあなたの事好きなの知っている

くせに。幼馴染なのはわたしだって一緒なのに。さつき、叔父様の息子のカイル様がお見えになったのよ」

「わかりました。戻りましょう。それはそうと、わたしもシャロンのことは好きですよ」

「その好き、じゃないのにい。もういいわ」

シャロンは不貞腐れたように横を向いてしまった。

＊

談話室に向かうと、エレンと楽しそうに話す、若者が目に入る。

眩しいくらいの艶のあるシルバードの髪、澄んだ黒に近い青い瞳。何か言葉にならない感情に支配されて、ラドビアスは胸を押さえた。自分は、彼を知っている。それは、この世界の彼ではないが。なぜなら、初めて会ったという相手に、まだすがたを見ただけの相手に感じているこの感情は、嫉妬だからだ。お馴染みの感情。彼はこの世界のヴァイロンなのだ。

「戻ったか、ラドビアス。カイル、話すのは初めてかな？ 今家のことを任せているラドビアスだ」

「ああ、執事のルシチアンの息子だね。君がここを取り仕切っているの？ わたしも気になって久しぶりに来てみたんだが、すごい有様だな。大丈夫なのか」

「わたしが至りませんで。申し訳ありません」

ラドビアスの謝罪に、エレンがカイルに慌てて釈明する。

「こいつが事務を始めたのは、今年からだよ。今は立て直そうと二人で頑張っている途中なんだ」

「そうか、でもいつでもわたしが相談にのるよ。父上はあんまりあてにはしないほうがいいけど。わたしは、君のことも、シャロンの事も大事に思ってるんだから。大変なら、遠慮なく言ってくれよ。援助も含めて出来るだけのことはするから」

エレンの手を取って語りかけるカイルの様子はとても誠実さに溢

れていて、ラドビアスは苦しくなつて顔を背けた。

分るのだ。理由なんてない。カイルが人間的に優れている事を。エレンに好意を抱いている事を。そして、彼女を幸せに出来るだろう事も。彼がヴァイロンの写し身ならば。

その後から、ラドビアスはそれこそ寝る間を惜しんで執務室に籠つて溜まった書類と格闘した。一週間後、書類は綺麗に片付き、これからの展望も開ける状態に持っていけたと彼は、ほっとペンを置く。

あくびを一つもらして、背伸びをすると自分の部屋に疲れた体をひきずりながら戻る。あれ以来、エレンとも事務的に話すだけになったが、自分からは話しかけることは出来なかった。記憶が蘇つてしまった今となつては、これ以上踏み込むことは出来ない。

ところが、ゆっくり戸を開けると、今まで考えていたその本人が部屋にいた。

「エレン」

「遅いじゃないか、もう少しで寝込むところだった」

「寝ても良かったのに。どうしたんです？」

答える代わりにエレンは抱きついてきた。

「エレン？」

「なんでおまえは、あれきり何も言つてこないんだ」

「それは」

それは、今の自分はここにいてはいけないから。あなたと愛し合うのは、違う自分なのだと分ってしまったから。

言葉に出せないせつない気持ちでエレンを見つめると、するりと彼女の指がラドビアスの唇に触れる。

「口付けて、ラドビアス。いつものように」

思い出してしまうと、彼女の言葉は魔法のようにラドビアスの思考を奪う。彼の愛した人の顔で、声でそんな事を言われてしまう……。

この人は、カルラではないと。分つていても手が止まらない。他の人の事を想いながら抱くなんて不実なことだと分っている。それでも、ただ嬉しくてたまらない。

折れるほど抱きしめると、痛いと言いながらも彼女の手にも力が入る。そのままもつれるように二人は寝台に倒れこんだ。

「愛してる、ねえラドビアス。名前を呼んで」

何度も交わす口付けの後、首筋に顔をうずめていた、ラドビアスにかかる言葉。それは、魔法が一瞬に解ける呪文になった。

「エレン、すまない。わたしは何て事を」

「ラドビアス？」

そのまま、ラドビスは避けるように立ち上がると、外に飛び出して行った。

背中に、すまないってなんだよという言葉が小さく聞こえた。

乾いた落ち葉が踏みしめるうちに湿った音になる。目の前には、噴水が水を静かに垂らしている。ラドビアスは、この後に及んで斜め後ろを振り返った。そこは、屋敷のある方向。願望が叶ったと喜ぶべきだったのか。

自分を呼ぶ声に応えれば良かったのか。

でも、自分が愛しているのはカルラなのだ。似た人では我慢できない。なんて自分は強欲なのか。あの口付けも何もカルラに捧げたいもの。それでなければ満足できない。

「わたしは、幸せになれない性格なのかも」

苦笑いをしながら、ためらいもなく彼は水の中に身を沈めた。

*

「ラドビアス、寝てんの？」

体を揺すられてラドビアスが目を開けると、クロードの顔が間近にあった。

「待ちきれなくて探しに来たら、ラドビウス寝てるんだもん」

「クロードさま、すみません。どのくらい経ったんでしょう？」

「うーんとクロードは、どのくらいだっけ？　と横の魔獣に話しかけながら首を捻る。

「半刻くらいか、それより少し短いくらいかな。それより水場なんてないよな」

クロードの言葉にラドビウスも辺りを見回すが、周りは同じような広葉樹ばかり。

「わたしとした事が聞き違いだったんでしょうか。夢を見ていたんですよ」

「夢？」

ええ、とラドビウスが笑う。

「どんな夢？」

「嬉しく、悲しい夢でした。でもクロードさまも出てきましたよ」

「どんなだった？」

聞かなければ良かったとクロードは思うことになるが、全ては後の祭り。

「クロードさまが可愛いドレスすがたで、わたしのことが好きだと仰ってました」

ラドビアスの言葉に、げえと大声を上げてクロードは彼から飛びのく。

「お、おれが？　ラドビウスに？　す、好きってえ？」

はいとニヤリと笑うラドビウスに、クロードは恐る恐る聞く。

「で、おまえは何と言ったの？」

「はい、わたしも好きですと応えましたよ」

ケロリと言うラドビウスにクロードは、青くなった。

「夢の話だよな」

「勿論」

横で笑い転げている魔獣に、こらつと雷を落としてクロードは、

ぶつぶつ言いながらも元の道へと帰る。

「クロードさま」

「何？」

「とてもお可愛かったですよ」

「うるさいっ。勝手におれのドレスすがたなんて見るなよ」

「仕方ありません、夢なんですから」

ラドビアスは、そう言ってクロードの後に続く。

彼の懐にある、小さい水筒がぽちゃりと水音を立てた。

10 いるか、いないか（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になっております。

名前が今と変わっております。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・・ベオーク時代 「カルラ」その後「イーヴァルアイ」

ラドビアス・・・ベオーク時代 「サンテラ」その後、「ラドビアス」

10 いるか、いないか

(十)

人でない何かの存在を感じる。

身近に、いつもいつも。

もしかしたら、自分もすでに人ではないのかもしれない。

「妖精って信じる？」

「妖精ですか？」

「そう」

真面目な顔で見あげる年若い主人の問いに、ラドビアスは怪訝な顔をして見返す。

「いませんね」

「いないの？」

いかにもがつくりといった風情に含み笑いを漏らすが、しっかりと主人に聞かれてしまったようだ。不満そうな声が即座に返る。

「なんだよ、いるかもしれないじゃないか。どうしていないと断言できるんだよ」

「何をそんなお伽話みたいな事を仰っているんですか。花の妖精、草、木、風、そんな物がそこらじゅうにいたとしたら煩くて大変です。一体なんでそんな事を考え付いたんです、クロードさま」

「だって、今そこに寝そべっている奴らだって、まさに異形の物じゃないか。魔獣がこの世に存在するなら、妖精だっていたっていいだろう。なあ、おまえたち」

クロードの言葉に赤い大きな翼を持つ魔獣は、はっはっ舌を出

して尻尾を振る。その横のドラゴンは、軽く後ろ足の鉤爪で頭の後ろをばりばりと搔いてまた丸くなった。その反応にまたもむくれる。

「なんだよ、おまえたちまでおれをばかにしてる？」

ちえつとクロードは、ふくれて立ち上がると雑木林の中へ足を踏み出す。

「どこへ行かれます？」

「すぐ戻ってくる」

ざくざくと音をわざと立てて歩いていく少年の後姿に、ラドビアスはやれやれと肩を竦めて寝そべっている二つの塊に向かって低く言う。

「クロードさまについて行け。悟られぬように」

返事を返す間も無く、二頭はすがたを消した。

「何だよ」

目の前に伸びている野葡萄の蔓にさえ、文句を言いながらガサガサと枝を掻き分けてクロードは歩いていった。別に目的があるわけでは無い。だいたい、クロードにしても妖精が本当にいるなんて考えていたわけではない。自分やラドビアスが、あるいは魔獣がそうであるように。何か、人の範疇では捕らえきれないものがないたらと。そう、自分たちが異端の存在だと感じるからこそ、そんな物がこの世には珍しくもなくいるんだったら。そう思いたかったのだ。

「ちえつ」

手に持っていた棒切れを滅茶苦茶に振り回す。周りの木々に当たってぼきぼきと音がする。その音さえ、いまいましく思っただけクロードは思い切りよく放り投げた。

「痛っ」

その声に、ごめんと反射的に謝ったクロードは、言った後に自分の周りを見回すが何もいない。二つ先の大木の上をリスが逃げる

ように走っていくだけだ。今の声は誰が？

「リ、リスじゃないよな」

上を見ていたクロードに後ろから、ぐると低い唸り声が注意を即すように聞こえる。

「アウントウエン、サウンティトウーダおまえたち来てたの？」

さらに黒い鱗に覆われた前足がクロードの足元を軽く叩く。

「何？ サウンティトウーダ？」

足元に目をやったクロードは、そのまま動けなくなる。クロー

ドの足元にある、いや、倒れている物は 何だ？

初めは、巨大な蝶かと思った。または、緑の虫。だが、ガラス細工のような透き通った羽がついている体はむしろ人に近い。

まさかと思いながらもクロードはしゃがんで、その緑のものをそおつと手に持って立ち上がった。

壊れるんじゃないかと恐々触ったのだが、以外にもそれ、はしっかりとしている。あくまでも透き通る緑の羽は、陽の光を受けて、きらきらと多彩な色をのせる。

「おれ、夢見てるのかな？ どう思う」

問われて、赤い魔獣はクロードの手の中のものに鼻先を近づけてくんくん匂った。そして、顔を上げるとふっふつと息を吐く。

「分らないよ、それじゃあ」

クロードは、それ、を手にのせたままどうしようかと途方にくれる。でもここに放っていくわけにはいかないよな。おれのせいだし。そう思ってそつと人差し指で頭らしきものを撫でてみる。

「う、ううん」

緑の生き物は、その刺激に気がついたように声を出した。

「だ、大丈夫？」

言葉が通じるのかなんて、この時は考えもしない。それほど驚いていたから。

「いきなり、でかい丸太が飛んできて……あんたが助けてくれたの？」

「でかい丸太？」

普通に丸太を思い浮かべているクロードに、サウンティウーダが地面から先ほど彼が投げた棒切れを咥えて見せた。

「ああ、それか。それで大丈夫、怪我はない？」

大丈夫と頭をふるふると振って。それは、クロードの手の上に立ち上がる。緑の触覚のような二本の長い髭みたいなものがゆらり、と揺れた。

「助けてくれてありがとう。あたしは、ラシュエンダ。あなたは？」

「おれは、クロード。実は、あの棒は……」

ラシュエンダと名乗った物はひらひらと、クロードの周りを飛び回って、彼の鼻先で空中に止まる。

「あたしを助けたって事は大変な事なのよ」

「え？」

大変の意味が分らず、クロードはラシュエンダの言葉の続きを待つ。

「妖精の森にご招待よ」

ラシュエンダが笑い声で言うのを途中まで啞然と聞いていたが。

「ちょ、ちょっと待ってよ。おれは行かないし、だいたい助けたんじゃないっておれは……」

眩しい光が、クロードと魔獣たちを囲む。あまりの眩しさに目を閉じたクロードは次の瞬間、どさりと地面に投げ落とされた。

「いたたた。アウントウエン、サウンティトウーダいる？」

二頭が小さく吼えたのを確認してゆっくりとクロードは、頭をめぐらせる。

「ええと、さっきの景色とそれほど変わったようには見えないけど、そのほうがいいに決まっているのに、何か驚いて損をしたと思っている自分を持て余しながら、クロードはぶつぶつ文句を言う。

「だってさっきと同じ場所だもん」

そんな声に、抗議しようとするのを向いたクロードのまん前にいた

のは、緑の透き通った髪の少女だった。顔は、蠟のように白い。緑の透ける膝までの布を体に幾重にも重ねて着ている。裸足の足が目にまぶしいくらい白い。

「で、君だれ？」

「ラシユエンダって言わなかったかしら？」

「ラ、ラシユエンダってあの小っこい虫みたいな？」

「虫は余計よ。変わったのはあんたの目よ。妖精の本当のすがたが見えるようにしたのよ」

「へ、へええ」

「ついて来て、クロード」

「嫌だ」

「いや？」

ラシユエンダは、思ってもみなかった少年の返事に驚く。今まで妖精に会わせてやると言ったら、みんなほいほいについて来たのに。こういう場合はどうしたらいいの？ おばあちゃん。彼女は心の中で助けを呼ぶ。

「妖精と会えるのよ。それに、妖精の宝物を見せてあげるわ。ね？」

「別に。妖精なら、今君を見たからいいよ。宝物も別に興味ない。

おれ人を待たせているし、じゃあね」

「待って、えつと。とにかく待って」

ためらいもなく元来た道を帰ろうとする少年に、すっかり調子を狂わされてラシユエンダは、クロードの手を掴んだ。

「ねえ、お願い。来てくれないとあたし、村のみんなに怒られるのよ」

「怒られる？」

「そうそう、そうなのよ。みんなしてあたしを打つわ。あんたのせいよ」

泣き落とし、果ては脅迫と、ラシユエンダは必死で言葉をつなぐ。その甲斐あってクロードが肩を落として彼女の方へ向く。

「ちよっと行っただけだ。長居はしないよ」

「うん、うんそれでいいわ」

どんな手を使ったって、人間がその気にさえなればいいのだ。
ラシュエンダは、ほっと胸を撫で下ろした。

だが、ラシュエンダに手を引かれて歩き出したクロードに、二頭の魔獣が前に回りこんで行く手を阻む。

「どうした？　ちょっと行くだけだ。勿論おまえたちもおいで」

「ええ？　この獰猛な生き物も行くの？」

「獰猛？　ぜんぜん怖くないよ。こいつらが行かないなら、おれも行かないけど」

クロードの隣で、威嚇するように大きな口を開けている魔獣。

そのどこが、獰猛じゃないのよと思いつつもラシュエンダは、笑って見えるように口を精一杯横に広げた。

*

何の変哲も無い森を歩いて行くと、いきなり視界が開けた。そこにあるのは、片田舎らしい村の風景。　だが、クロードが村の入り口に足を踏み入れた途端、わらわらと村人が集まってたちまち囲まれる。

「よくやった、ラシュエンダ。少年じゃないか、上出来だ」

口々にラシュエンダを褒めながら、クロードはどんどん村の中に歩かされていく。その最奥に、周りとは一線を画す、鐘楼を持つ古い建物がそびえていた。

「ここは？」

「妖精王の住まう城よ」

「ふーん」

分厚い扉が音も無く開く。　中に入るとわずかにかび臭い匂いがした。　階段を上っていくと、赤いビロードのカーテンが豪華に彩る広間に通される。　赤い色と金の刺繍。　その広間にある大きな

椅子にゆつたりと座っている男が、笑いながらクロードを手招く。

「おや、活きのいい男の子だね。こちらへおいで。わしの宝を見せ
てやろう」

「それ見たら帰れるんだよね。おれ急いでるんで早くしてよ」

あまりの言い草にこめかみに筋をたてるが、なんとか城主は笑顔を崩さない事に成功する。

「ほら、これだ。君の未来が見える鏡だ」

一抱えもある古い青銅製の鏡を、城主は少年の目の前に突き出して見せる。

「……じゃあ宝も見だし、おれ帰るね」

ところが、思ってもみなかった少年の反応に、城主はおろか、そこにいた者すべてが唖然と口を開けた。

「見たのか？　しっかり見ろ」

「見たけど。だから？」

城主は、驚いた表情を貼り付けたまま、少年を通り越して、ラシユエンダに視線を移す。

「おまえ、人間を連れて来たんだろうな」

「え？　あ、はい」

そう応えた後にラシユエンダは、クロードを盗み見る。

「おまえ、自分の未来を見て何も思わないのか。後ろにいるのは何だ？」

城主の声に応えて出てきた異形の物に、城の中は大騒ぎになる。

「これは、魔獣じゃないかつ。魔獣なんかを持っている奴が人間なわけがないだろう。おまえ何者だ」

指を突き付けられて、クロードは首をかしげながら応える。

「おれは魔道師だけど、一応人間じゃないの？」

「魔道師」

ラシユエンダが絶句して後ろによろよると下がる。

「そんな性質の悪い者を連れてきてしまったなんて」

「どうということ？」

「わしらは、人間を連れてきてその鏡で正気を失わせた後、夢と過去の出来事を頂いておるのだ。からっぽになった人はやがてすがたを変えてここの住人になる。久しぶりの食事だと思ったのに。

魔道師だったとは」

「騙してここに連れ込んでおきながら、なんか酷い言われ方だよな」

「何よ、魔導師もあたしたちも同じようなもんよ」

「どこがだよ」

「人を騙して操るところよ」

ラッシュエンダがさも嫌そうに言うのを見て、クロードは噴出す。

「自分たちが、性質が悪いって宣言してるなんてさ。しかし妖精がこんなに性悪だったとはおれも残念だよ。じゃあ、帰るね」

「だめだ」

クロードの背中に城主が低く言った。

「秘密を知った者を返すわけにはいかん。死んでもらう」

大勢の虫。ざわざわとその羽ばたきの音が城の中にまで聞こえる。クロードは、はあとため息をついた。

「アウントウエン、サウンティトゥード、好きにやってよし」

クロードの声が終わらないうちに、広間は阿鼻叫喚に包まれる。

逃げ出そうとする妖精たちが折り重なって倒れる。その頭を左右に引きちぎりながら魔獣は、広間を横断すると窓を突き破って外に飛び出した。

「や、やめてくれ。帰っていいから。いや、もうどうぞ帰ってくだ
さい」

城主の懇願にクロードはにまりと笑って、元は窓だった穴から外に顔を出す。

「おまえたち、もういいぞ。帰ろう」

窓から飛び降りたクロードを背中で受け止めたアウントウエンが、不味そうに口から透明な羽を吐き出した。折り重なる死体の山。遊びで食いちぎられた頭が転がる。

それを恐る恐る物陰から見送る妖精たちは、二度と魔道師には手

を出さないと誓った。

「それで、こんなに遅くなったと？」

クロードの前で腕を組んで難しい顔をしている青年は、ふんと鼻から息を出す。

「だって本当だもん。なあ」

クロードが助けを求めるように魔獣を見たが、二頭の魔獣は気持ち良さそうに丸まっていて知らん顔だ。

「だって、じゃありません。妖精のせいにして今日さぼった罰に、明日は一日魔方阵の勉強ですからね」

「ええっ、じゃあせめて印の練習にして」

「だめです」

ひいいと弱音を吐いてクロードはしょんぼりと一番星が出た空を見上げた。

「妖精なんて大嫌いだ」

「なんです？」

「なんでもない。妖精なんか、いなくていいよ」

「だから言いましたでしょう？ 妖精なんていません」

「まったく同感」

素直なクロードの言葉にラドビアスは、ちらりと笑った。

「げふっ」

サウンティトウダが満足そうにゲップをして、その拍子に口からバラバラと何かが落ちる。

それは、ガラス細工のような綺麗な羽 だった。

11 牙を剥く花（前書き）

今回は、ちょっと大人風味となっております。
ご了承ください。

ベオーク自治国の過去のお話です。

「レイモンドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になっております。

名前が今と変わっております。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・・ベオーク時代 「カルラ」その後「イーヴァルアイ」

ラドビアス・・・ベオーク時代 「サンテラ」その後、「ラドビアス」

11 牙を剥く花

(十一)

綺麗な花には棘がある。

棘どころか、鋭い牙を持っている 知らない内にそれはしつかりと首すじに突き立てられているのだ。

「ねえ、インダラ。カルラがどこにいるか、知ってる？」
「いいえ」

部屋に入るやいなや、カルラの居場所を尋ねてくる主人にインダラは苦笑いを浮かべた。

「最近、逃げまくっているからな。なかなか会えなくてさ」

すらりとした長い足を長椅子に投げ出すようにインダラの主人、バサラは身を椅子に沈める。 先ほど昼日中からカルラの母アニラとの情事を楽しんでいた。 その名残の色香を体に纏わせながら物憂げにインダラを見つめる。

「今までアニラさまとお会いになってたのに、もうカルラさまの事ですか？」

「ふん、別にカルラと寝ようとしてるわけじゃないんだからいいだろう？ だいたい、カルラはまだまだ子供じゃないか。子供に手を出すほどこらえ性がないと思っっているんじゃないだろうな、インダラ」

憤慨したようにバサラは、顔を背ける。

「どうですかね。アニラさまは、主の子供が欲しいと仰ってます。このところ、他の方の寝所からのお誘いを断っているようですよ」「知ってる、そう言っバサラは綺麗な顔を顰めて上半身を起こす。

「そついうの、困るんだよな。他の兄たちの不興を買うのは避けたいからな。だいたい、わたしの子供はカルラに産んでもらう事に決めるんだし。カルラが大人になるまでの遊びだと思っているのに煩いことだ」

長い亜麻色の髪を掻き揚げながら、ため息をつく主人の色香に、インダラは大きくため息をついた。

「嫌なら、だれかれ構わず、その過剰な色気を振りまくのをやめてください。そんなだから、相手をする女たちが誤解するんですよ。で、探せばいいんですか、カルラさまの居場所を」

「うん、そうしてくれ。それで、しばらくアニラから誘われても寢所へは行かない。上手く断われよ。放つてある仕事を片付けなくちゃあな。サンテラ一人に任せておくわけにもいかない」

「もつと早くその事に気づいて欲しいと思ってましたよ」

「うるさいよ、インダラ」

バサラは、言葉の割に笑顔のまま、軽く羽織っていた服を床に脱ぎ捨ててインダラに手を差し向ける。

「着替え、とつて」

「はいはい。ところで、どれが優先なんです？」

「とりあえず着替え、かな」

バサラの執務室の机に積み重なる書類を前にサンテラは、今日何度目かのため息をもらす。成人したバサラにも押し掛かってくる書類仕事。真面目にやっていたのは、初めの何年だったろう。

やれば、インダラや、サンテラ、ほかの次官など及ばないくらい迅速に仕事をするくせにバサラは、何かと出かけるいい訳を作っては仕事をさぼってしまう。そのお供にはインダラが付く事が多く、結局仕事はサンテラがやる事になる。

「少し休むか」

呟いて窓に目を向ける。

晩秋の紅葉した中庭を挟んだ反対の回

廊に見えたすがたに笑みがこぼれる。奥の宮とここの回廊は近道になっている。あまり知られていないせいか、見かけるのは見知った顔だけだ。

「カルラさま」

毎日、書類仕事に籠っていてもそのすがたが見えるだけで嬉しい。彼がため息をつくのは、窓を見た先に彼がいらないせいだから。

そんなに度々通るわけではないと思っているのに、また、窓を見てはため息をついている。

濃い紫の袍を着て両手に大きな本を抱えて歩くその少年にサンテラは心を奪われていた。

十五歳になり、そろそろ子供の体から大人の体になろうとしている。本人の意向はともかく、それはどう見ても女性へと変わっていくように見えた。

少年　と言ったが、サンテラの主人の一族は皆、成人するまで女性、男性どちらにもなり得るのだ。そして、カルラはバサラの望みどおり、このまま女性になるだろう。細い顎に華奢な肩の線。服に隠されている体つきもたぶん。

亜麻色の長い髪も、色素の薄い水色の瞳もバサラにとっても似ている。同じ親を持つ兄弟だと分るそのすがた。以前は、兄のバサラをあれほど慕っていたカルラだったが。十二歳のある晩、兄と母の情事の現場を見てしまっただけから口をきくこともなくなった。

それは当然、サンテラとも会うことが無くなったということでもある。

カルラは母親の宮から自分の荷物を引き払い、さっさと独立してしまう。数ある離宮の一つに居を構えて、長兄ビカラからの招へいにもまったく応じようとしなかった。ベオークの一族にしては驚くほどの潔癖さにビカラもほとほと手を焼いている。

それは、ベオークの一族は血族内で婚姻関係を結ぶ必要があるから。カルラも成人したあかつきには、いやおう無く親、兄弟と関係を結ぶことになる。

サンテラの見ている前で珊瑚色の美しい衣装の女性がカルラの後ろから声をかける。亜麻色の髪を複雑にハオタイ風に結い上げている女性。背後にぴたりといるのは、しもべだろう。と、いうことは彼女はアニラなのか。しんとした回廊は思いのほか声が通り、中庭を挟んでいるのにこちらまで声が聞こえる。

「カルラ、待ちなさい。いつまでわたしたちを避けているの」
「うるさい、名前を呼ぶな」

「カルラさま、お言葉が過ぎますぞ。母君に向かってそのようなしもべの言葉に、振り返ったカルラが大きく手を振り上げてしもべの頬を殴りつけた。

「わたしに母親なんかいない。成人したらここを出て行くからな」
「そうね、出ていけばいいわ」

小さく言ったアニラの言葉にカルラが物問い気に立ち止まる。

「バサラのこどもを産むのはわたしだけでいいわ」

「おまえなんか大嫌いだった」
落とした本をそのままに、カルラは身を翻して走って行く。その目に光ったものは涙だったのだろうか。大変なところを見てしまったという罪悪感とカルラへの憐憫の情にサンテラはしばらく何も手につかなかった。

「どうします？ 主のカルラさまへのご執着はとつくに分っているじゃないですよ」

柱の影から成り行きを見ていたインダラとバサラは出て行く間合いを完全に失っていた。

「嫌だなあ。アニラのやつ。このままカルラとわたしの仲を邪魔されるのは堪らない。女の嫉妬って怖い」

「一つ質問ですが」
「何？」

「主とカルラさまの仲って、邪魔するも何も何にもありませんけど」
「これからあるんだよ。その前に障害は取り除かなきゃあね」

バサラの言葉にインダラはぐくりと唾を飲み込む。 ああ、今主人はとても悪い顔をしている。

「今晚、アニラを私の寢所に呼んでよ、インダラ」

「いいんですか？」

「うん、今日はクビラと寢所を交換する。ねえ、クビラの事をアニラは何と言ってた？」

「変態だと言っておられましたね。寢所を共にするなんて絶対嫌だと」

「クビラにそのまま言っちゃろう。どうなるか、楽しみだな」

「ビカラさまが知ったら大変なことになりますよ」

「仕方ないじゃない。クビラが殺っちゃったんならさ」

その晩、カルラの母、そしてバサラの母親アニラは死んだ。

「痛ましいことだな」

伝えに来た魔道師にそう言っただけ。バサラは、うーんと背伸びをした。

「朝は、花茶がいいなあ。ねえ、インダラ」

につこりと笑う主人に、インダラはわずかに寒気を感じて身を震わせた。 この豪華な大輪の花は、血を吸って生きているのだ。

誰かの犠牲を糧にして生きている。 棘よりももっと恐ろしいものを備えているのだと。

「花茶だなんて、誰かに見られたら大変ですよ。お祝いじゃないんですから。部屋を交換したのだから、こういう風にビカラさまに釈明する気です？」

「そうか、そこまでは考えてなかった。おまえ、いい案は無い？」

ああ、自分もすでに喉元に主人の牙が食い込んでいるのだ。インダラは薄く笑った。では、もう仕方ない。 自分は喜んでこの花に喰われることにしよう。

それは、カルラ十五歳の晩秋の出来事だった。
ルラはベオークから出奔する。

その二年後、カ

12 名前（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。
一話一話、独立した話になっております。

名前が今と変わっております。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・・ベオーク時代 「カルラ」その後「イーヴァルアイ」
ラドビアス・・・ベオーク時代 「サンテラ」その後、「ラドビアス」

12 名前

(十二)

昔の話しよう。大昔の話を。
今の話しよう。
いつものように。

少年は、他の歳若い男たちと一緒に何時間も歩かされ、ようやく一つの建物に辿り着いた。少年の生まれは、ここからそんなに地域的には遠くない農村。この島国は、ほんの数十年前には荒廃が酷く、人は生きて行くのも困難な小国の集まりだった。

そこに、小国の一つモンド国の王、ヴァイロンが一人の魔道師と契約を交わし、島国を統一。その魔道師による結界に守られた国の歴史が始まった。

争いの無くなった国は今、ゆつくりとすがたを変えようとしている。
だが、

「今年の麦は、少しも実らなかった。冬を越せるかどうか」

「貯えなど何も無いよ、あんた」

かさかさに乾いた手を振って中年に差し掛かった女が、一つしかない板間に掛け布を取り合うように丸まって寝ていることもたちに目を移す。

「どうしよう、あんた」

まだ、そんな歳でも無いはずが、老年に差しかかるというような容貌に変わっている女。それは、この国の暮らしの過酷さによるものからか。冬の四ヶ月ほどは、一歩も外に出ることもままならないほど、この国の寒さは厳しい。そのため、戦火にまみれて

いた日々が終わってもなかなか、国土を豊かにするに至らない。

国家が統一された恩恵など、ここの農民にとっては、まだまだ絵空事のようなものだ。

「今日、いい話を隣村の魔道師さまから聞いたんだ」

「いい話？」

いい話だといいながらも、男は苦い顔を妻に向ける。話の不穏な様子に女は、男に先をねだることも出来ない。束の間、沈黙が流れる。

「こどもを引き取ってくれるところがあるんだ」

「……あんだ」

「売るんじゃない。魔道師になれば、ひもじい思いをすることも無いんだそうだ。それに読み書きまで教えてくれるっていうじゃないか」

女の引きつった顔を見ないように、男はどう良いのか早口で先を続ける。

「上等なべべを着て、おらたちのように朝から晩まで働かなくてもいいんだと。おらは、明日一番下のガルを連れて行こうと思ってる」

「ガルを？ あんだ、あの子はまだ七歳にもなってないんだよ」

縋りつく女を乱暴に男は引き離す。

「だからだ。この冬をあいつは乗り越えることは出来ない。あんなひよろひよろで小さい体で何日も飢えるんだぞ。春になったらって、あいつは畑仕事の一つも出来ない。娘なら、まだ奉公に出せるもんを」

「だ、だって」

掛け布からはみ出さないように必至で兄や姉の間に潜っている細い体を女は、呆然と眺める。この子が生まれてから、豊作だったことは無い。そのせいか、他の兄弟と違って体は少しも大きくならない。病弱で手のかかるこども。そのくせ、ときどき大人が答えに詰まるような質問をする。男は、端からこの末っ子に疎ましいものを感じていたのかもしれない。

「魔道師さまが、試験をするらしい。それに合格したものだけが廟に召しだしてもらえる。そのときに支度金が出るらしい」

「あんだ、それで」

「ばかやろう、金は必要だ。綺麗事じゃないだろうが」

頬を殴られて転がる音が板間に響く。その音に、寝た振りをしていた小さい体がびくりと震えた。

おらは、捨てられるんだ。はした金と引き換えに。

唇をかんで寝返りを打つ。かまどに細々と残った薪がごとりと音を立てて落ちた。

ゴート山脈の麓の廟まで来て、やっと先頭にいた魔道師が止まる。ここでしばらく待つように告げるとすがたを消した。

他からも連れてこられた少年たちが疲れきって座り込んでいる。冬が近づき、貧しさからこどもを廟に差し出す親が絶えないのだ。その中の一人が話しかけてきた。

「ねえ、君いくつ？　ぼくはもうすぐ七歳なんだ。ねえ、お腹すかない？」

灰色の髪の毛のくりりとした目の大きい少年がそう言いながら隣に座る。

「うるさい。おらは、なんにも持ってないぞ。あっちへ行け」

「あはは、ぼくも何も持ってない。正直言つとお腹が痛いんだ」

「お腹がいたい？」

相手の言葉に、驚いて相手のお腹に手をやると、ふいに手を掴まれて平衡を失って倒れ込んだ。

「何するんだ？」

「ふふ……ひっかかった」

押し掛かってこそばしてくるのに、慌てて体をよじる。だが、執拗に脇に触れる手に思わず笑いが漏れた。そのうちに、二人は大声を上げながら転げまわって遊んでいた。

「その二人、静かにしなさい」

現れた先ほどとは別の魔道師の声に、はっと我に帰る。さっと

元の場所に戻った少年がそつと声を出してくる。

「ぼくは、ルーカス・ランバーっていうんだ。君は？」

「お、おらはガルオネラ・ハントだ」

二人は、顔を見合わせてにつこりと笑って手を振った。

その後ガルオネラは、勉強をしながら、雑用をゴート山脈にある廟の一つでこなしていた。そんなある日、その小さな廟の廟主に呼ばれる。

「ガルオネラ、今日はわたしについてハンゲルの廟に行ってみるか」
「ハンゲルの廟ですか、廟主さま」

あまりの嬉しさにガルオネラの声が上ずる。ハンゲル山は、ここゴート山脈の山でも一番標高の高い所にある廟だ。高いのは、標高だけでは無い。この国の魔道教の総本山でもあり、魔道師の祖イーヴァルアイという大魔道師がいるところなのだ。話だけしか聞いた事のない場所に行けると聞いてガルオネラの顔に朱がさす。

それから、二日の道行きを経て、彼らはやっとハンゲル山に着いた。目の前にそびえる大きな巨岩に掘り込まれた廟にガルオネラは、ため息しかでない。

「これが……ハンゲルの廟」

「そうだよ、下で待っていなさい。手続きをしてくるから」

何の手続きなのか、分からないまま、広い玄関の前に佇んでいると肩をこつんと叩かれる。

「ねえ、久しぶり。ガルオネラだったよね、きみ」

振り返った先には、あの灰色の髪 of 少年が悪戯っぽい瞳で笑っていた。

「ああ、きみはルーカス」

「あれ、言葉使いが変わってる」

ルーカスという少年がにやりと笑う。

「あれから二年も月日がたったんだから当然だろ。きみはなんの用

事でこの廟に来たの？」

「あれ、知らないの？　イーヴァルアイさまが、竜印という尊いものを授ける者を広く集めていらっしやるんだ。わたしは、頭がいいから廟主さまに推薦を受けたんだ。きみもてつきりそうだと思うけど」

「竜印？」

では、さっきの手続きとはそういう事だったのだろうかとかとガルオネラは、廟主の消えた場所を振り返る。

「ねえ、手続きってまだまだ時間が掛かるみたいだし、探検しない？」

「探検？」

うん、とうなずいてルーカスは、手前の階段を上り始める。だめだと言ったが、彼は聞く耳を持たない。放っておけばいいものだが、どうしてもそれも出来ず、ガルオネラは、ルーカスの後を追った。何回もくるくると螺旋状の階段を上がる。このままてっぺんまで行くのかと心配だったが、ようやくルーカスは、階段を離れて廊下に足を踏み出した。

「待てよ、ちょっと。もう帰ろう」

「ねえ、声がしない？」

「声？」

それこそ、見つかつて怒られたら大変と、ガルオネラは周りを伺う。シンとした暗い廊下に確かに声がした。

「行ってみよう」

「だめだ、ルーカス」

ところが、またしてもルーカスは走り出し、ガルオネラはその後を追った。奥の部屋から声がする。それは、泣いているような胸が締め付けられるような声。思わず、戸を開けると寝台の中から思いもかけず、硬い声が飛んだ。

「誰も入るなと言わなかったか？　すぐに出て行け」

「あ、あのすみません。どうしたんですか？　どこか、痛いんです

か？」

こどもの声に、寝台をきしませてそこにいた人物が起き上がった。
「こども？ おまえ誰だ」

涙の後が頬に残ったままの顔。だが、その美しさにガルオネラは、出ていくのも忘れて見入ってしまった。女の人 だと思った。そのくらい、細く、白い儂げな容貌の十六、七歳の少年。

魔道師に女性はいないのだから、男の人なんだと思う。

「わたしは、ガルオネラ・ハント。あっちは、ルーク・ランバーです。どうしたんですか？ どこか、加減でも良くないんですか？」
自己紹介をすませると、二人の少年は寝台にいる少年のおでこや、背中をぺたぺたと触った。

「どこが痛いんです？」

「ど、どこって。む、胸が痛いといえば、痛いけど」

「擦ってあげます」

「じゃあ、わたしはお茶を入れますね」

かがいしく動くこどもたちに、少年は毒気を抜かれて大人しく世話されていた。

「起きれますか？ お茶が入りましたよ。わたしね、お茶を入れるのが上手いらしいんです」

得意気に茶器を差し向けるこどもから、少年は茶器を受け取り口にする。

「……うん、上手いな。ラドビアスには及ばないが、わたしの好きな濃さと香りだ」

「おまえ、名前は確かルークだったな」

「はい」

「じゃあ、今日からルークにしる。おまえは、ガルオネラか。では、ガリオールだ。家族になんてもう会わないのだから、苗字は捨てろ」
「ええ？」

いきなり、名前を変えさせられて二人のこどもは息を呑む。その尊大な態度の少年が魔道師の祖イーヴァルアイだとその後、入って

来た魔道師によって告げられる。

「ただいま戻りました。イーヴァルアイさま」

現在、竜印を持った唯一の魔道師が竜門から姿を現す。そして部屋にいる者の顔を見回して眉を上げた。

「このこどもたちは誰です？ お付きの魔道師はどこに行ったんですか」

「こっちの茶色頭は、ガリオール。灰色頭はルーク。おまえがつけた親父は、首にした」

「首に？ どうしてですか」

自分が、首都のサイトスで王の執務にかかりきりになっている間に、一体何があったのか。そう思って主人を尚も見詰めると、彼の主人は仕方なさそうに言葉を継ぐ。

「あいつ、口が臭かったんだ」

「それだけですか」

「足も臭そうだった……な」

「イーヴァルアイさま」

うるさい、わたしが決めたんだからと、イーヴァルアイはあつさりとラドビアスに釈明する気を捨て去って言葉を切った。ふん、と言って手を出す主人に心得た仕草で着替えを出そうとするが、灰色の髪の毛が足早に衣裳部屋に向かって行く。

「イーヴァルアイさま、昨日は群青のリボンだったし、今日は^{えんじ}臙脂色のシャツとリボンにしませんか」

頭だけこちらに向けて少年が聞いてくる。そんな態度をと、咎めようとしたラドビアスの前で主人が腕を組みながらそれに答えた。「そうだな、でも浅い緑のもいいと思うけど」

「今日は断然、臙脂ですよ。まあ騙されたと思って着てみませんか？」
驚くような気安い言葉で、少年は臙脂色のシャツを広げて見せた。イーヴァルアイは、その様子に笑いながら応じる。

「分かった、そうする。ガリオール、サイトスの宰相どのにおまえ

の草稿した租税についての論文を見せてやれ」

開いた口が閉まらないラドビアスの後ろにいた少年が、一礼をして部屋を出て行く。わずかの間に戻ってくると書類の束をラドビアスに手渡した。面白くない気持ちをいだきながら彼は書類を読むが。

「これをこのこどもが書いたのですか」

「ああ、こいつは使える奴になるぞ」

そう言っただけの主人は笑い声を立てた。

その後、何年かの後にラドビアスは、首都サイトスでの宰相の地位をガリオールに継がせてルークにゴートの廟長の座を与える。それから五百年の時が流れて。

「きつとラドビアスさまは、わたしたちに主を取られなくなかったんだよ。仲良しだったからなあ。わたしたち」

「まさか。ばかな事を言うもんじゃ無い。何かお考えあつてのことだ。クロードさまの前で何を言ってる」

サイトスの王城魔道師庁の一室。ガリオールの執務室にいた、ガリオールとクロードの前に現れた灰色頭の青年魔道師は、絶対そうだと一人うなずいている。

「へえ、ユリウスに名前をつけてもらっただ。でも、前の名前に戻りたいと思う？」

クロードの質問にいいと答える声が二つ重なる。

「主にいただいた名前は、わたしにとつての宝でございます」

「ガリオールの言うとおり。特にガリオールなんて、ガルオネラなんて酷い名前だったんだからね」

「ルーク」

笑い転げるこの国の重鎮にガリオールは、厳しい声を上げる。

「おまえをサイトスに出入り禁止にしてやる」

「ガルちゃん、厳しい」

つられて思わず笑うクロードにも忘れない、ガリオールの声。

「クロードさまは、明日から呪文のおさらいに巻物を一巻づつ、書きしてもらいます」

「ええ？」

「ガルちゃん、酷い」

「うるさいっ」

「あははは」

「クロードさまっ」

程なくイーヴァルアイは死んだ。結界は消え、竜印を受けていた魔道師はラドビアス以外すべて消えた。そして今。

昔の話をしよう。大昔の話を。

今の話をしよう。

いつものように。

13 夢うつつ

(十三)

夢うつつというのは、起きているのだろうか。それとも寝ているのだろうか。

寝ている間、意識はどこへ行っているのだろうか。

果てしない冒険の旅、あるいは、破天荒な時空の狭間へ。

いつも帰って来られるからといって今日はどうなのか。

うーんと寝返りを打つクロードは、自分の近くの話し声に気づいて薄目を開ける。一人部屋だったはずが、暗い室内には確かに大人らしい、落ち着いた声が聞こえていた。内容は所々聞こえないし、言っていることも少し不自然なのだが。

「最近我は、山ばかりで待たされて面白くないな。久しぶりに人間の肉でも食いに行きたいもんだ」

「それはいいが、見つければ叱られるぞ。自分は、山で熊でも食っておくさ」

「ふん、良い子ぶりやがって。おまえ、人の肉なんて食ったことも無いんだろう」

「ばかなっ、あるに決まってる」

明らかに場の雰囲気殺気だつてきて、クロードは止めようと起き上がるうとする。ところが体は鉛のようにぴくりとも動かなかった。金縛りというのはこの事だろうかと思いつながら目だけは必死に声の方へ向けた。

「じゃあ、おまえは最後にいつ食べたんだ？」

「ベオークから来た、教皇の一族の一人を食った。その時おまえもいたはずだ。あれは不味かったな」

思い出したようにその声の主は、ぐえっという音を立てる。

「おまえはどうなんだ？」

「我か……」

その質問に答えるか否か、しばらく間が空く。

「我は、呼び出された主人には否応なく仕えるが。契約が終わる瞬間に気に入らない主人は食ってやることに決めている。前もその前も食ったがな」

「食わなかったことがあるのか？」

「……無い」

そこまで聞いていたクロードは、この語り合う声が誰なのかが分かって驚愕に目を見張った。

「でも、食いたくなかった奴もいたにはいた」

ここに希望の光を見出したクロードの前で声は淡々と続く。

呼び出される時というのは、いつも体中が引きちぎれるような不快感に襲われる。実際、魔界から經典の呪文によって引きずり出されるのだが。

天井をぶち破って降りてきた赤い魔獣は、勢いがつきすぎていたのか着地に失敗してしまった。なんとという失態。初めにがつんと格好いいところを見せて主人に見せ付けてやろうと思っていたのにと、苛つきながら顔を上げるとそこにいたのは子供だった。

「ガアウウウウン」

思いつきり腹の底から脅かすように吼えてやると、少年は驚いてひっくり返る。その様子があまりにも面白かったので倒れている少年の頭を前足で小突いてやった。

「やめろっ、アウントゥエン」

子供特有の高い声が悲鳴のように聞こえる。流石に呼び出した

主人にこれ以上乱暴もできず、魔獣は足を引つ込めて伏せの姿勢をさっさとすると目を閉じた。

「おい、起きろよ。アウントゥエン。早くおきてよ。早くしなきゃ困るんだよ」

それを見て、慌てた様子の少年が必死に魔獣の背中を起こすように揺する。

「早くしないと、警備の誰かが来ちゃう。宝物殿から逃げなきゃならないのに」

と、いう事はここは、どこかの王宮か何かなのだろう。魔教典の在り処は、その時期によっていろんな所にある。前は南の国の王が所有していたが、はて、あれからいくらの時が経ったのか判然としない。時間の流れがここと魔界では違うのだ。

泣きそうな主人の懇願に仕方なくアウントゥエンは立ち上がる。

食いでた無いこどもだが今は主人だ。

問うように見ると、少年は緊張の面持ちで魔獣の耳元へ口を寄せようと爪先立ちする。

「僕をここから出してよ。このお城から、お願い」

そんな事かと魔獣は、鼻に皺を寄せると伏せをして、少年の方に顔を向けた。

「僕に乗れって言うてんの？」

あちこちの毛を引つ張られて辟易しながらも魔獣は、少年が魔獣の上でしっかりとしがみついたのを確認するまで辛抱強く待っていた。遠くからたくさん足の足音が聞こえてくる。金属音がするということは、兵士なのだろう。

一つ確認するように小さく吼えると少年がぴたりと体を寄せるのを感じて、アウントゥエンは立ち上がったと同時に目の前の窓に向かって飛び上がった。

ガラスの割れる音。 ぱりぱりと木製の窓枠が壊れる音。 それに気づいた兵士たちが宝物殿の扉を開けた時には、少年を乗せた魔獣は空に舞い上がっていた。

「セイリンさまっ、矢を放てっ、王子さまごとあの化け物を打ち落と……」

その声の終わらないうちに顔を向けた魔獣が大きな口を開けた。語尾の代わりに飛び出したのは、炎の中での叫び声だった。

「今のすごいね。おまえ火が出せるの？ 格好いいなあ」

背中の少年が感心したように呟くのが、ことのほか気分が良い。そこでもう一度空に向かって火を噴いてやると凄く凄くとはしゃぐ声が聞こえる。

そのままいくつもの山を越えてある山の麓に下りる。姿勢を低くして降りるように促すと少年は名残おしそうに魔獣の背中から降りた。

用はそれだけかと聞くように顔を向けると少年は、魔獣の首に腕を回してきた。その腕があまりにも細くてむげに振り払うこともできず、魔獣は黙ったまま少年の好きにさせていた。

「僕さ、男子のいない王に養子に來たんだ。元は王の一番下の弟の子供でさ。父上に懇願されて一昨年王宮に來たのに」

泣き笑いの顔を魔獣の顔に擦り付けながら少年は先を続ける。

王の娘と結婚して王位を継ぐことになっていたんだと寂しそうに。「今年になって、二番目の后が男児を産んでさ。なんか途端に父上がよそよそしくなったと思ったら、一歳を迎えたら僕を排嫡するって相談していたんだ。きっと僕は殺される。だけど、家にも帰れないよ。僕を匿ったりしたら本当のお父様もお母様も殺されてしまう。僕は、どこへ行けばいいんだろう？」

その後は、涙で言葉にならない。わんわんと泣く少年の頬をぺろりと舐め上げてやるというっそう大きな声で泣く。

「お母様に会いたいよお。お父様にお会いしたい」

どこにも行けないと言いなから本心は自分の両親の元に帰りたいのだった。魔獣であるアウントゥエンにはそこら辺の事はあいにく分からなかったが、彼の要求は分かった。

頭を振って、縋りつく少年を引き剥がすと姿勢を低く取る。

「え？ どこに行くの？」

「おかあさまというところだ」

魔獣の言葉にびっくりした少年は、慌てて首を振る。

「だめだよ、僕が帰ったりしたら」

「おまえは行きたいのだろう？ おかあさまに？ 一度行ったらまた帰ってくればいい。気が済んだらどうする」

「お母様とお父様に逢えたら、僕は死んでもいいや。お礼に僕を食べてもいいよ」

「いいのか？」

「うん、一口で食べてね」

「分かった」

ふっきったように少年はそう言う。魔獣に跨った。

少年のうろ覚えの道案内のおかげで随分と遠回りしながら、しかし確実に彼らは少年の生家に向かっていった。大きな峠の向こうに見える街並みに見覚えがあるのか、少年の声が弾む。

「ここだ、やっと着いたね、アウン」

正式な名称を言われないと普段は、無視しているものだ。魔獣を縛っているのは、魔獣の名前で契約した呪文なのだから。だが、今回はなんとなく少年が勝手に縮めて言う名前が結構気に入っていたりするのだ。何と言ってもこの子供ときたら、何もできない。

兎も捕まえてやって目の前に親切で放ってやっているのに叫び声を上げて逃げ出したりする奴なのだ。仕方なく犬歯を使って皮をはぎ、肉の塊にして炎で炙ってやると旨そうに食べる。

悪いことにそれを眺めるのも悪くないと思っっている自分がいる。

「アウンがいないと怖くて寝られない」

そう言うもんだから、夜に狩にも行けない。大きな魔獣の首に手を回して眠る少年の体が冷えないように長い尻尾をふわりと体に掛けてやると、少年は小さく身じろいだ。

宝物殿に忍び込むことは前からやっていたらしいが、そこで埋もれるようにあった魔経典に目をつけて読み込むなど、並大抵の頭で

はないはずだ。腕力にはかなり難がありそうだが、おうさまという生き物は自分ではあまり戦わない生き物だったはずだ。なら、この少年のような頭がいい奴のほうが向いているのではないかとも思う。

「おまえはおうさまにはならないのか？」

「前はなるんだと思ってたけど。今は僕は生きていたらいけない人間なんだ。アウン、死んだ証に僕の頭の骨と指に嵌めてる指輪を王様に届けて欲しいんだけど。そうしたら、お母様もお父様にも変な嫌疑はかからないと思うんだ」

「おまえ、変わってるな」

「そうかな」

「人はふつつ、死ぬのを怖がったり、嫌がったりするもんだ」

魔獣の言葉に少年は泣きそうな顔で小さく笑った。

「僕だって、怖いし嫌だけど。……仕方ないよ。こんな時代のこんな境遇に生まれてきたんだから。でも、最後に伝説の生き物と話せるなんてすごい経験もできたしね」

強がる少年の言葉を神妙に聴きながら魔獣はなぜかざわざわと心が落ち着かなかった。明日になれば、契約が終わってまた魔界に帰ってのんびり過ごすことができるというのに。胸がずっしりと重くなるのはなぜなんだろう？

「ここしばらくにも食ってないはずなのに」

何ヶ月も食べなくなっただって腹はすぐが体調にそれほど響くわけはない。それが、おおきな魔獣を食べた後のように胃がもたれたように重い。それは、どんな理由なのかが分からない。分からないが、今の主人との関わりに関係あるのではと思う。食べたいのかと聞かれれば、食べたくない。

「小さすぎて食いでが無いからだ」

口に出してみても自分ながら嘘くさい。そうは思ってもこんな感情になったことの無い魔獣はそれを解消する術を知らなかった。

あっと言つ間に、それこそ逃げるように夜は駆け足で去っていく。

一睡も出来ずに少年の傍らにいたアウントウエンが体で庇おうとしても朝日は容赦なく少年の体を晒す。

「うつん、朝になったの？」

「まだ寝ててもいいぞ」

「だめだ、朝のうちに人が動き出す前に城に入ろう。行こうアウン」
主人に言われて逆らうこともできず、それでもノロノロと羽の毛繕いをしていると、再び少年に行こうと言われて仕方なく少年を背中に乗せる。

城の尖塔に音もなく降り立つと、アウントウエンは大きな体に似合わない繊細さでそつと戸を押し開いた。

「ここから、朝お母様がお祈りにいく場所に直接行けるんだ。ここで待っていて」

「我也行こう。心配だ」

「大丈夫」

いきなり少年は大人になったかのような顔でアウントウエンにならずくと確かめるように階段を降りて行った。

たいした時間では無かった。それなのにじりじりと胸を焼くこの気持ちは何だろう。少年の安否を気遣うだけなのか。会いたいのか、会いたくないのかも判然としない。

会えば嬉しいのだと思う。だが 主人を食わねばならない。

知らない振りをして帰ってしまうか。このまま逃げてしまおうか。魔界から離れてこの世界で生きていく。それも有りなのかとも思う。

「食べたくない」

「だめだよ、最後の命令はきかなくちゃ」

アウントウエンの言葉を聞きつけたように戻って来た少年が小さく、でもきつぱりと言った。

「おまえが戻す呪文を言えば、即座に食って帰ることができるが、頭と指輪は持って行けないぞ」

「大丈夫、言葉じゃなくて魔方陣にしたから。ここに持っているか

ら」

ね？ と少年は笑って見せた。

「これに僕の血をつければおまえの縛りは消える。ありがとう。僕のお願いを聞いてくれて。君は僕の最後の友達だよ。君の体の中で僕は生きていくんだ。いろんな時代に、いろんなところへ。君の血になって肉となって。ありがとうアウン」

抱きついてくる少年の涙を残らず舐め取るように頬に舌を伸ばす。塩の味とともに感じる締め付けられるような思い。

「友達という名前もくれるのか。そういえば、おまえの名前を聞いて無かった」

「そうだね。僕、セイリンっていうんだ」

「セイリン」

「そいつは食べたくなかったな」

「ふーん」

話が終わると同時にクロードは強烈な眠気に襲われて目を閉じた。聞きたいことが山ほどあるのに。

*

「起きてください、クロードさま」

「え？ 朝？」

昨日の晩のことが思い出されてクロードは急いで体を起こす。

「アウントウエンとサウンティトウダは？」

「何言ってるんです？ 人に見られるとやっかいなのでもう山へ行かせておりますよ」

じゃあ、やっぱりあれは魔獣たちなのかとクロードは差し出された着替えに袖を通しながら考える。

「あいつら、喋れるんじゃないか。なんでおれには喋らないんだ？」

「そうなんですか？」

気の無いようすでおざなりに返すラドビアスを一睨みしてクロードは、もっとすごい事に気づく。

「あいつ、食べたくないって結局食ったんだよな。今までの主人で生きてた奴っていないって……うっそ、やっぱり、夢だ、夢にしとこっ」

クロードは、窓に向かって宣言する。

「おれは不味いぞおっ」

「夢うつつの時、意識はどこへ旅しているのか。」

誰にも分からない。

分からないから夢うつつなのだ。

うつつの間、過去へと記憶は帰ることがある。懐かしい人に会いに。

14 反抗期（前書き）

レイモンドール国が出来て間も無い頃の話です。

14 反抗期

(十四)

「どうしたらいいのか分からない」

あああとため息とも唸り声ともとれるような怪しい声。さつきから、この国の首都サイトスの王城内、魔導師庁の一室に響いていた。その声の主である灰色の頭の魔導師が、机に向かってこの国の宰相に背後からしな垂れかかる。

「何でも嫌って、何？ ナンなの」
「は？」

来年の税収を見積もっていたガリオールは、いきなり数字の世界から、違う世界に引つ張り出されたようにきょとんと顔を振り上げるように後ろを見た。

「何の話だ、ルーク」

あのさあと言いながらこの国の最古参の魔導師三人の内の一人、ルークがガリオールの机にどっかりと座る。

「おいつ、書類の上に座るなっ」

「雛ちゃんのことなんだけど」

「雛ちゃん？」

そつくりと聞き返すガリオールにルークはぶつぶつと文句を言う。
「えっと、ヴァイロン国王からもらった子供だよ。主がクロードって名前をお付けになったけど、小っちゃくて可愛いから廟では、雛ちゃんって呼んでるんだよ」

「それが？」

「何言っても、嫌嫌って言ってさあ。怒っていいかな」

国家規模の思考を中断させられて、相談を受けた内容にガリオール

ルは眉根を寄せた。

ほんの数十年前まで、この国は小さな貧しい領主国の集まりに過ぎなかった。その一国の領主、ヴァイロン王が国を統一し、今に至る。しかし、彼は武力によって国の統一をなしたのでは無い。外国から来た一人の魔導師と、ある契約を結んだのだった。

魔導師は、この国を魔術の結界で閉じて守る。その代償として……。

国は魔導師を保護する。

王は、即位ごとに彼の子どもの一人を魔道側に引き渡す。

そして、数年前に廟に連れてこられた王の子供はルークの手で養育されることになったのだが。

「最近、わたしの言うことなんてまるでできなくて」

それが第一反抗期だなんて、ここにいる誰も分らない。

「朝なんだけどき、雛ちゃんはいつもパン粥を食べてるんだけど。

今日は、ふわふわで甘いパンが良かったって駄々をこねるからさ。

急ぎ用意させたら、もう要らないって」

「で？」この話の出口に不安を覚えながらガリオールが促す。

「ローブを着せようとお付きの魔導師が手をかけたら、自分でやりたいって言い出して」

「それは、いい事だ。成長の証ではないのか？」

違うつと言いながらルークがガリオールの額を弾く。

「まだ、上手く着れないんだよ、雛ちゃんは。結局着れなくてローブを放り出して泣き出して、最後に言うには「ルークが悪い」だぜ。訳が分らないよ」

うーんとガリオールも顎に手をやる。幼いとは言え、前は聞き分けが良かったような気がする。言ってることに整合性が無いということは、何か頭が混乱する病気にでも彼はかかってしまったのだろうか。

「それは、不味いな」

「だろ？」

「医者に見せるとして、おまえもすぐにハンゲルの廟に帰れ。クロードさまの看病をして差し上げなくては」

「じゃなくてさ」

ルークは大げさに両手を上げる。

「子供の世話は大変なんだよ。今日は仕事をわたしと替わってくれ、ガリオール」

「何？ 今何と言ったんだ、ルーク」

「おまえがクロードの面倒をみてくれ、ガリオール」

啞然とするガリオールをよそにルークは、宰相の椅子からガリオールを追い出して満足そうに座るとそこにあつた書類をぱらぱらと捲つた。

なんでこんな展開に とガリオールは思ったが、クロードの様子を自分の目で見ておくのもいいかと思ひ直す。

「書類にいい加減な数字を書くなよ、ルーク。行ってくる」

ひらひらと手を振るルークにそう釘を刺してガリオールは竜門をくぐつた。

*

「イヤだあつ」

三歳か四歳くらいの幼子がひっくり返つて手足をばたつかせていた。燃えるような赤い髪が特徴のその少年を扱いかねて、魔導師が数人取り囲んでいる。

「クロードさま、お靴を履かないとお寒いですよ」

「ひながじぶんで、はきたかったのにい。もうくちゅなんてはかない」

「クロードさま、で、では、ご自分でお履きください」

「もう、イヤだ。ルークがはかしてくれないと、くちゅははかない」

「えええ？」

「何を騒いでおられるんですか、クロードさま。靴ならわたしが履かせて差し上げます。泣かずにお座り下さい」

竜門から出てきたガリオールが、騒ぎを止めようとやんわりしかる。

「おまえなんか、きらいだあ。ばか、ばか、ばか」

いきなりのバカ三連発に、手が出そうになるのをぐっと堪えてガリオールは、周りを取り囲んでいた魔導師を見る。魔導師になるとはいえ、この子供は王子なのだ。叩くわけにもいかない。

「クロードさまは、いつからこんな事になった。なぜ、医者に診せないのだ？」

「医者でございますか？ ええと、ごく最近でございます。さっそく医者呼びます」

おたおたと走って行く魔導師を厳しく見ながら、ガリオールは、そういえばルークに一日のお世話なる物を預かっていたと思い出す。

「これか……」

開いてみると、朝からのクロードの生活を追って書かれたものらしかった。そこで、今頃は何をしているのかと文面を指で追う。

『朝の支度を済ませたら、食事。なるだけ本人のしたいようにさせる。終わったら、お手洗いに行かせる。これは重要。今が大事なので忘れないように。いかなる時でも半刻に三回は、お手洗いに誘うこと』

半刻に三回とは、多いのではないかとガリオールは首を捻る。まさか、ここに病気の一端が現れているのではないかと思いながら、クロードを見た。

「クロードさま、お手洗いに行きましようね」

「いや」

「いや？」

もう一度ガリオールは、書き付けを捲る。ここに書いてあると

いう事は、これが毎日繰り返されているという事ではないのだろうか？ なぜ、いやなのかが分らない。

「クロードさま、お食事が終わったら、いつもお手洗いにいかれているのではないですか？」

「いくよ」

「そうですか、では行きましょう」

「いや」

ぶくつと頬を膨らませて嫌々と首を振るクロードに、ガリオールはどう説得しようかと思案にくれる。

「お手洗いに行かないとお腹の具合が悪くなりますよ。さあ、行きましょう」

「いやだっ、ばかっ」

どこかで何かがぶつとりと切れた音がした ように感じた。

いや、ガリオールには、はつきり聞こえた。

「うええええんっ」

泣き叫ぶクロードを抱きかかえてガリオールは強行手段に出た。ずっと手洗い場に着くまでクロードは泣き続けて「ばか、ばか」と言い続けていた。

「はい、着きましたよ。わたしたちの手を煩わさないでください。おしっこしてください」

「いや」

「は？」

「いやだ」

泣きたくなった。 いや、少し泣いていたかもしれないとガリオールは思った。

*

「それでこの話はどこに行きつくんだっ？ ルーク」

顔を真っ赤にしたリチャードが噛み付くようにルークに喰ってか

かる。

「ああ、この後は盛大にお漏らしをしたという事で落ちもつく」
涼しい顔でルークが口を閉じる。

「大昔の話を持ち出してどうする気なんだと言ってるんだ」

「え？ 面白くなかった？」

ルークがしれっと応じる。

「そういえばあの後、わたしがサイトスに戻ったら、書類にでたらめな数字が書き込まれていて、修正するのにえらく時間がかかったまったく」

ガリオールがさつき、あつた事のように渋い顔をみせた。

「だけど、書類仕事と子育て、どっちが大変か分っただろう？」

「確かに」

納得の表情でガリオールは、ルークに頷いてリチャードを見る。

「おまえ、最悪だったぞ。まあ病氣じゃ無かつたらしいが」

すぐに医者に診せた結果、「反抗期です」の一言だったのを思い出して、はあとガリオールはため息をつく。

かつてのクロード、今のリチャードは奇々しながら話が終わるのを待つ。

「くちゅ、ぐらいで騒ぐなってことだね」

「ばかを一生分言われた気がする」

「いい加減にしてくれっ。何をさせたいんだ？」

「察しがいいな、リチャード」

リチャードの言葉に、ガリオールが物分りが良くなって良かったと頷く。

「今日一日、今の雛ちゃんの面倒みてくれ」

ルークがにこやかに告げた。

15 占い

(十五) 占い

その日は、クロードは朝からついてなかった。

始まりは、野宿した洞窟内で水が漏れて、しかもそれはクロードの頭上だったことから。

そこで頭を洗おうと外に出たら、サウンティウーダの尻尾を踏んでずっこけて鼻を擦りむいて。

「なんだよ、おまえ笑ってるんだろ」

鼻の上に皺を寄せたアウントゥエンに因縁をつけてたら、盛大にクシヤミをされて顔中べちゃべちゃに。

「なんだよ、一体」

ぶつぶつと文句を言いながら川まで行くと、あっと言う間に発生した鉄砲水にクロードは体を攫われる。それは、まさに「あっ」という間の出来事で、ついていったアウントゥエンもサウンティウーダも髭の一つも動かさなかった。

さつきまで、暖かい手が額に当てられていた。おれは夢を見ていたのだろうか？ 眠りの縁を漂っていたクロードの両手が、いつも傍らにいる魔獣の感触を探す。だが、荒い織り目の敷布をなで擦るだけ。

「ラドビアス？」

目を開けると古い天井板の無い吹き抜けの屋根の裏側がじかに見えた。顔を横に向けるとベニヤを重ねて強度をつけるように作つてある板壁に手づくりしたような机と椅子が置いてある。

「ここはどこだ？」

それに答える者もないようで、クロードはため息をついて体を起こす。果物を入れていた木箱をつないだ物に板を置き、何枚かの敷布を敷いただけの硬い寝台を降りる。

ここが一体どこなのか調べるために、そこら辺を覗くと、机の中に見慣れた物が入っていた。

「これは、羊皮紙」

中を見ると、レイン文字が書かれている。大陸では、レイン文字はまったく見かけないために、クロードはしばらくそれに見入っていた。

「なんでここにこんな物が」

「あんた、そこで何してる？」

いきなり、女の声がしてクロードは「ふえっ？」というわけの分からない声を上げる。

「それには触らないで欲しいんだけど。あたしの宝物なんだからさ」

「宝物？ 羊皮紙が？」

声のしたほうに目を向けると、土色の長い髪をくくると巻いて頭に高く結っている若い女。朝黒い顔だが、アーリア人の血が入っているようで美しい様子の女性。

「それは、あたしが見つけたんだ。あたしはここで占いとかやってる。そこに書いてあるのは、きっと昔の凄い魔法の呪文かなんかなんだよ、きっと」

女が手を出すと、つけている金属の細い腕輪がもシャリーンと音を立てた。耳にも大きな輪になっている金の装身具がついている。それは、砂漠に近い地方の装束だった。砂漠に住む種族には、土地を定めず、移動する者が多い。水を求め、オアシスにつくと踊りや歌、博打など娯楽を提供して金をもうけてまた、次のオアシスに行く。

「あんたは、沙族の血を継いでいるんだね」

「良く知ってるね。そうだよ、あたしの父ちゃんが沙族だった。母ちゃんはアーリア系だったらしいけど」

女に渡す前に、チラリとクロードは羊皮紙に目を通す。

「ねえ、それは多分たいした事は書いてないと思うけど」

「あんた、読めるのこれ？」

うんと頷くクロードの肩を勢い込んで女は掴む。

「痛いよ」「ああ、ごめん」

もう少し、見せたと滲んだインクの後を指でたどる。もう何百年も経っているのだろう。かなりセピア色に変色している上に、

掠れていて読みにくい。

「名前らしきものが書いてある。ロレイン・キール……、それとキリ……ア・ランドルフ」

そこまで言つて、クロードは顔を上げた。

「キール・ランドルフ商会の創業者の名前じゃないかな。何で大陸屈指の貿易商がレーン文字なんか書いているんだ？」

レーン文字は、この世界で使っているのは、レイモンドールの魔導師たちだけだったはず。キール・ランドルフ商会といえば、知らぬ者はいないというほどの豪商だ。確か、元はレイモンドールの大陸の出先商として、大陸に進出したと聞いた。キールとランドルフという友人が共同経営して本家より、大きくした出世話として聞いたことがある。もう二百年ほど前の話だった。

「なんて書いてあるの？」

「名前が書いてある」

その先は、二人の名前の下に契約を示す魔方陣が描いてある。この二人が二人の間で何かの契約を交わした証明と言ったところか「とにかく、術は、この二人にしか効力は無いし、個人的な事だと思うけど」

明らかに落胆の色を見せた女に、クロードは苦笑する。占いは、この羊皮紙に書かれていることは分からないのかと思つてくすりと笑った。だが、クロードは魔導師しか知らないはずのレーン文字を使っていた、ロレインとキリアという商人に興味を抱く。

そこに。

「クロードさま、一体そこで何をしていたらっしゃるんですか」

窓が、がくと大きな音とともに開けられて、見慣れた顔がクロードを怒ったように見降ろす。

「おれ、水に流されたんだよ。この人に助けられたんだ。窓壊すなよ、ラドビアス」

「今にも壊れそうなこんなところにいる方が危険です。早く出てく
ださい」

助けてもらったお礼などうっちゃって、ラドビアスはクロードに家を出るように言う。

「ああ、そうそうおまえ、二百年前の事って覚えてる？」

「二百年前ですか？」

女は、クロードの言葉に仰天した。この細っこい綺麗な少年は、頭がおかしいらしい。こんなに可愛いのに天は、やはり二物を与えないのだと女は思う。

「二百年前？ 事によります。わたしだって全て覚えているなんて無理ですから」

おかしいのは、少年の連れもだったと女は二度驚く。二百年前の事を聞く少年に真面目に答える男 かなりネジが緩んでる。

「キール・ランドルフ商会の創業者のこと」

「ああ」

聞いた途端にラドビアスは、大きく頷く。

「ロレインとキリアの事ですか」

「彼らは何者？」

「魔導師だったんですよ。二人とも、中級魔導師で枢密使として、魔導師の不正を探索していました」

「魔導師が事業を起こしたの？」

「二人とも還俗したんですよ」

「記憶を消さないで？」

「あれは、ルークが勝手にやったことです。普通は、中級以上の魔導師に還俗の許可はませんが、出た場合は魔術の漏洩を防ぐため

に記憶を消します」

「ふうん、何があったんだろう？」

「まあ、クロードさまはお知りにならなくてよろしいことです」

ラドビアスの言い方にクロードはむっとして口を尖らせた。この体のせいでいつまでたっても自分は子供扱いかと思うと気が狂いそうだ。

「なんだよ、言えよ」

「魔導師も人間だと言うことです」

「……んなの分かってるよ。当たり前じゃないか」

「あんたたち、何者なの？」

今まで黙っていた女が、たまらず声を上げる。

「何者だか占ってもらおうか」

ラドビアスが懷から金貨の入った袋を取り出した。その様子のあまりの悪役っぷりにクロードは、嫌な話題を振ったんだなと感じていた。

「いいわよ、あんたにする？ それともぼく？」

ぼくと言われて、クロードは臍を曲げてそっぽを向いた。

「ほら、座つて。手を見せてよ、手相を見るわ」

大人しく座ったラドビアスの手を取った女は、途方にくれるように顔を上げた。

「どうかしたのか？」

しらじらしく聞くラドビアスに女は、「生命線が無いわ。あんた、とつくに死んでいるはずの人間つてことに」言ったあとに、ばかよねと引きつった笑いを浮かべながら机の引き出しを開ける。金貨をちらつかせている客を怒らすわけにはいかない。

机の上に何枚かカードを置いて、それを表に返してまたもや、女は固まった。

「あんたに死神がついているんだけど。誰かに魂を掴まれているって」

ああ、あたしはお金を貰い損ねたと青くなった女は、目の前の男

が笑っているのに気づいて背筋が凍った。その横にいた少年も笑いながら男の肩をつつく。

「あはははは、良く当たるなあ。お姉さんの占いの腕すごいよ。生命線無いってさあ」

「笑いすぎですよ、クロードさま」

ラドビアスは、クロードに怒った顔を見せて、金貨を一つ机に置いた。

「女、主人を助けてくれたそうだな。これはその礼だ、とっておけ。もう女は言葉も出ずに、カードを捲って少年を見た。

「ひっ」そのカードには、少年が悪魔を連れていると出たのだ。

「どうしたの、お姉さん？」

「あ、あんた、悪魔を使ってるの？」

その答えを聞きたいのか、聞きたくないのか女にはもう分らなかった。ただ、体の震えが止まらない。

「うん、可愛いのを二頭ね。見せてあげようか？ お礼に」

その言葉に返事は帰ってこなかった。女は失神していた。

「あのさあ、ラドビアス」

外に待たしてあった魔獣に乗って戻る道すがら、クロードは後ろからサウンティトウダに乗っているラドビアスに声をかける。

「おれにだって分るよ。キールとランドルフの関係くらい。おれだってもう十七歳だぜ」

それに、あの羊皮紙には続きがあった。

『ロレイン・キール、キリア・ランドルフ両名は、死が二人を分かつまで共にいることを誓う』そう書いてあったのだ。それは、二人の愛の誓いの文章だと思う。魔導師は男ばかりの世界なんだからそんなこともあるだろう。

現に自分の兄だったダリウスだって、男としてユリウスを意識していた。ぼくは、女の子が好きだったけどと思ってから、アリス

ローザの顔を思い浮かべて即座にクロードは落ち込んだ。

もう、分かれてから二年も経つ。きっと誰か好きな人ができたろう。別れたときに十七歳、今はもう十九歳。男女に限らず、この年代は一年で姿が大きく変わっていく。

その中で取り残される自分。

「おれはいつまで経っても見かけは、十四歳なんだよな」

「クロードさま」

いつの間にか横に並んでいたラドビアスが、心配そうにクロードの背中に触れる。

「クロードさまも、そういう事に關心のあるお年頃という事ですか。そういう処理の仕方とか、ご存知で？」

「な、何言ってるの？」

何を言っているのなんて、クロードには分ってるけど、口に出して言うことなのかよとクロードは、恐る恐る自分の従者を見た。

「無礼な、我の主人は知っている」

今まで黙っていたクロードを乗せていた赤い狼が、ラドビアスに文句を言うように声をあげた。

「こ、こらっ、何言ってる」

顔が信じられないくらいに熱い。隣のサウンティトゥーダまでがうんうん頷いている。

「さようでしたか。それではそのうち、花街にでも行きますか？」

顔色一つ変えないでラドビアスが言った言葉にクロードは、消えなくなる。

「もう……勘弁してくれ」

今日は朝からクロードはついてなかった。

一旦、自分たちが人間の言葉を喋ると知られた二頭は、言って欲しくない場面を選んでいるかのようなタイミングで危ない発言をするのだ。

これなら、黙ってるときの方が良かった。

主人の面目を保ったと大意張りの二頭に、何を言ってもムダだろ

う。

横でこっさり噴出す、ラドビアスに気がつかないふりでクロードは、自分が置いていったものを思い出していた。

そこに、大型の猛禽が姿を現した。

「これは、使い魔ですね」

「レイモンドールから来たみたいだけど」

やっかいそうな来訪者にクロードは眉を顰める。

そういえば、今日は朝からついていない日だった
と。

(十六)

この道は正しい道に続いているのか。

だが、正しい道ではなくてもおれは進んで行く。

それが自分の決めた事だから。

「何ですか、それは」

手を出すラドビアスにクロードは、羊皮紙に戻った使い魔を渡す。黙読していたラドビアスがつと、目をあげた。

「どうなさいます」

「そうだな、レイモンドールに戻る」

何かを言いかけて、ラドビアスは頭を振る。どうするか、聞いたのは自分で。主人は答えを出した。わたしに何が言える？

その手紙の内容は、レイモンドール国の国主であるクロードの双子の兄、クライブが叔父、コーラルにより殺されるかもしれない。レイモンドールは魔導師の国に逆に舵を取るように見受けられるという内容だった。

「王の正当な鍵を受けておられるクロードさまにお助けを請い願う所存です」そう結ばれていた。署名は、クロードの知らない名前だった。ダニアンと書かれている。

もう帰らないと思った二年前。

まだ、自分は何も成し遂げてないというのに。
だけど、クライブを見殺しにはできない。自分が押し付けるように王座を彼に突きつけて国を出たのだから。不穏な空気を感じ取っていたはずなのに。

おれは知らないふりで国を出てしまった。

ここで手を出して、また引つ掻き回していいものだろうか。もうレイモンドールは魔術とは、自分とは関わりの無い国になったのに。部外者たるおれが。

部外者だと思った途端に自分が一人で何もない空間に放り出されたような思いが胸に迫る。

「おれが行ってもいいものだろうか」

「クロードさまは、レイモンドール国をどうなさるおつもりだったのですか」

「どうするつもりって……魔導師の支配しない国にしたいとおっておれは……」

そうだ、おれはやり残したものがあつた。

「最後のけりをつけてなかった」

ラドビアスは、何も言わずに魔獣の鞍に付けた鞆の中から厚手のマントを取り出す。それは、かれらがレイモンドールから出るときに身につけていたもの。

「あの国は寒いですからね」

肩からかけられたマントの重みに泣きそうになる。

「なあ、ラドビアス。おれはあの国が好きだ。だっておれが生まれた国なもの。俺の大事な人たちが住んでいる国なんだから。でも」

「でも？」先を促すように相槌を打ってラドビアスがマントの留め金をかける。

「酷い事をするよ。でも目を瞑っていてくれ、おれのやりたいようにやらせてくれ」

懇願するように顔を上げた主人の瞳には涙が溜まって今にも零れ

そうだった。

「はい、黙っております。目を瞑っておりますよ」

こんなにも脆く弱い心をさらけ出されて、どうして願いを聞き入れないわけがあるだろうか。

「わたしは、あなたの従者ですよ。好きにお使ください」

「うん」

クロードは涙を右手の甲で拭って笑った。

「泣き虫だよな。外見がガキだと、中身まで成長しないものなのかもしれないな」

それはラドビアスの返事を待っている言葉ではないのだと彼はただ黙ったまま、魔獣を手招く。

「行こう、レイモンドールへ」

「はい、クロードさま」

二人はこの二年の時を魔獣の背に乗って遡っていくようだった。急ぐためにかなり上空を飛んでいるためにマントがありがたかった。

「何度か魔獣を休ませますので降りてよろしいですか」

「うん、任すよ」

砂漠近くのダルファンを過ぎれば、やっと入国したハオタイ国から出て行くことになる。ラドビアスの故郷だった土地。

そしてだんだんと馴染んでいた西側の建物が姿を現す。密に茂る森を見つけて降り立ったクロードは、羊皮紙に書いてあったダニアンという人物をラドビアスに尋ねる。

「なあ、ダニアンっていう魔導師を知ってるか？」

「ええ、モンド州のお隣、クロードさまもご存知のボルチモア州の州宰代理だった男かと」

「ボルチモアの？」

じゃあ、一回くらいは会っていたのかもしれないが、クロードは

全然記憶に無かった。

「上級魔導師だった？」

「いいえ、ですが彼の腕は確かだったと思いますよ」

クロードが知っていた魔導師はほんの一握りでしか、魔導師の中では天井人のような位の高い者ばかりだった。中級魔導師など覚えてもない。だが、ダニアンという魔導師は、自分の名前を追ってここまで使い魔を飛ばせるほどの魔術を使えるということだ。ユリウスこと、魔導師の祖であるイーヴァルアイが死んで上級魔導師はコーラル以外全て死んだのだから。

そのこともクロードに責任がある。おれがイーヴァルアイを殺したのだから。

「いけませんよ」

ラドビアスが悪戯を見つけたようにクロードに顔を向ける。

「何？」

「イーヴァルアイさまは御自分で死を選ばれたのです。クロードさま、何もかも自分のせいにするのはいけません。それはひどく甘美な罠なんですよ」

彼の言葉にクロードはどきりとする。

甘美な罠。

閉じこもってしまいたくなる。甘えていたくなる。どうせ、おれはと体を丸めて。そうだ、何もかも自分のせいにして前に進まないでいるのは楽だ。

自分の殻の中でいじいじと考えて答えの無い世界に漂う快感。

おれは不幸だと大手を振りたい自分が騒ぎ出している。

「そうだな、あれはイーヴァルアイの、ユリウスの決めたことだった」

主人の目に光が戻ってラドビアスは気づかれないようにほっと安堵のため息をつく。

仕方がないくらい、クロードの運命は過酷だった。庶子扱いで孤独だった幼い頃。無理やり永遠の命と引き換えに魔導師のしも

べにされてた十四歳の少年が辿ったのは、そのまま歳を取らない体と、殺戮の日々。そして、愛する者との別れ。彼が兄として、魔術の師として慕っていた者を彼は本意では無いながら、その手で殺さなくてはならなかった。

そして、国の転覆を図った反逆の徒として国から追われる立場になった。

「それを、わたしは甘えるな」そう言うのだ。

それに彼は、分かったと。そう応える。痛々しいほど前向きで悲しい人だとラドビアスは苦しく思う。彼はまだ十七歳だというのに、彼を待つ運命はかれを歳相応な弱音を吐く事も許しはしない。

「少し、お休みください」

薄手の毛布を大きな木の根元に敷くと、クロードがそこにごろんと寝転ぶ。直ぐに二頭の魔獣が傍らで丸くなってクロードは両側に手を回して目を閉じた。

このままレイモンドールに戻って暮らしてもいいのだとラドビアスは思う。ベオーク自治国に向かうことの方が遥かに困難で険しい。

恐ろしいとも思う。ベオークに行つて自分はクロードの身を守り通すことが出来るのかが確信できないのだ。

失いたくないと強く思うほどに、また前のように主人を裏切ってしまうのではないかとラドビアスは畏れる。信じられないのは、自分だった。

「クロードさま、良くお休みのところ申し訳ありませんが出発しましょう」

「ああ、悪い」

クロードも急がなくてはならないことは承知している。使い魔がここまでどれくらいかったのか分らない。

クライブの、自分の兄の命がかかっているのだ。

そして、クロードは決心していた。

おれは悪役になる。

魔導師が浮上できないほどの厄災となってレイモンドールの人々に刻み込むのだ。権力を魔導師に渡さないように。語り継がれるほどの悪魔になる。

何回かの休憩を挟んで進む彼らの前に海峡が現れる。青い群青。

波だっているが以前の濃い霧も激しい波も無い穏やかな青い境界。

「帰ってきたな」

「さようですね」

たったそれだけで、何も言わない。言わなくても分っているの

だ。ここは、おれの、おれの一番好きな所なんだ。だから。

「できることをする」

この道は正しい道に続いているのか。

だが、正しい道ではなくてもおれは進んで行く。

それが自分の決めた事だから。

了

16 帰郷（後書き）

これで番外編を終わります。

読んでくださってありがとうございます。

この続きは「レイモンドール転成の章」に続きます。

クロードの顛末は、今執筆中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0383e/>

クロード冒険譚

2010年10月8日13時28分発行